

助 勢 過 失 論

CONTRIBUTORY NEGLIGENCE

講 師

大 濱 信 泉

LECTURER N. OHAMA

1924

助勢過失論(Contributory negligence)

緒言	1
第一章 助勢過失ノ概念	8
第一節 過失競合ノ態様	9
第二節 助勢過失ノ意義及其決定標準	5
第一款 最後機會說	16
第二款 直接原因說	30
第三款 自然的傾向說	35
第四款 比較過失說	36
第三節 助勢過失ノ適用範圍	38
第一款 故意行爲ト助勢過失	38
第二款 第三者ノ助勢過失	39
第一項 無關係者ノ助勢過失	40
第二項 使用人ノ助勢過失	41
第三項 獨立契約者ノ助勢過失	44
第四項 監護者ノ助勢過失	46
第二章 助勢過失ノ法の構成	50
第一節 助勢過失ノ性質	50
第二節 助勢過失ノ私犯ニ於ケル法律構成的地位	58

第三章	助勢過失ノ法理的基礎	59
第四章	助勢過失ト因果關係	61
第一節	英米法ニ於ケル因果關係論ノ大要	61
第一款	總說	51
第二款	自然的蓋然的結果說	51
第三款	危險狀態說	55
第二節	助勢過失ト因果關係論トノ交錯	81
第五章	被害承諾ト助勢過失	83
第六章	海法ニ於ケル損害分擔制度ト助勢過失	86

助勢過失論

大濱信泉

緒言

一、不法行爲ニ於テ被害者自身ノ過失カ、(註一)不法行爲者ノ過失ト相結合シテ、損害ノ原因トナルコトハ其例ニ乏クナイ。即チ被害者ノ被ツタ損害カ、加害者ノミノ過失ニ依テ惹起セラレタノデハナク、被害者ノ過失ト、相待テ始メテ其發生ヲ見ルニ至ツタ場合カソレテアル。此種ノ場合ニ於テハ加害者ノ過失ノミヲ以テ、其損害ノ原因ト爲スコトハ出來ナイ。被害者ノ過失トノ間ニモ、矢張法律上ノ因果關係ヲ認メネハナラス。

(註一) Negligence 即チ過失ナル語ハ、主觀的ニハ不注意(want of care)ト言フ心的狀態(state of mind)ヲ指シ、又客觀的ニハ、不注意ニ出タル行爲即チ過失行爲ノ意味ニ用ヒラレル。併シ客觀的過失ハ結局主觀的過失ノ外形テアリ、又主觀的過失ハ、客觀的ニ行爲ニ表ハレサル限り、單ニ内心的狀態トシテ、法律ノ對象トハナルモノテナイカラ、兩者ヲ區別スル實益ハナイモノト言ハネハナラス。(Salmond's, Law of Torts, P. 22)從テ本稿ニ於テハ、用語上別段區別ヲ設ケナイコトニシタ。

抑々不法行爲者ノ賠償責任ハ、其者ノ過失行爲ト其結果被害者カ蒙ルニ至ツタ損害トノ間ニ、法律上ノ因果關係ノ存スル場合及其範圍ニ限ラレネバナラス。而テ此命題カラ逆推的ニ、他

人ニ損害ヲ及ボシタ場合ニ於テハ、過失者ハ法律上ノ因果關係ノ範圍ニ於テ、其損害ニ付キ責任ヲ負ハネバナラヌト言フ、第二ノ命題カ抽出シ得ラルル譯テアル。今此原理ヲ卒直ニ進展セシムルナラハ、二人以上ノ過失カ、各々損害トノ間ニ因果關係ノ存スル場合ニ於テハ、各過失者ハ、等シク賠償ノ責任ヲ負ハネバナラヌ、トノ結論ニ到達セネバナラヌ。即チ此種ノ場合ニ於テハ、共同不法行爲ノ問題ヲ形成シ、而シテ之等ノ共同過失者ノ被害者ニ對スル賠償責任ノ態様如何、即チ連帶責任ナリヤ分割責任ナリヤ及共同不法行爲者相互間ノ求償關係如何等ノ問題ヲ生スルニ至ルノテアル。ソノ何レナルニセヨ、苟モ損害ニ對シ原因ヲ與ヘタル過失者ハ、被害者ニ對スル責任カラ、全然免除セラルヘキモノテハナイノテアル。換言スレハ損害ノ原因トナレル過失ハ、ソレカ單獨原因テハナイトノ理由即チ第三者ノ過失カ、競合シタト云フ理由ヲ以テ、全然責任論ニ於テ閑却セラルルコトハナイノデアアル。

二、而シテ此理ハ被害者ノ過失ニ付テモ、同然テアラネバナラヌ。殊ニ民事責任ノ基調ヲ、道義ノ觀念ニ求ムヘキモノナラハ、被害者ノ過失モ、到底之ヲ閑却スルコトハ出來ヌ。何故ナラハ、自己ノ過失ノ結果ヲ、他人ニ歸セシメ、他人ヲシテ全責任ヲ負ハシムルコトハ、到底道義ニ副フ所以テハナイカラテアル。從テ過去ノ法律學モ、決シテ被害者ノ過失ニ付キ、責任論ノ範圍ニ於テ、考慮ヲ拂フコトヲ忘レナカツタ。羅馬法以來傳

ヘラレテ居ル過失相殺(Culpa Compensation)ノ原理ガ、即チソレテアル。併シ被害者ノ過失ヲ、責任ノ基礎トシテ法律上之ニ一定ノ價值ヲ附スヘキモノトシテモ、到底第三者ノ過失競合ノ場合ト同ニ取扱フコトハ出來ヌ。何故ナラハ被害者ヲシテ、加害者ト共同シテ、責任ヲ負ハシメルコトハ、論理上不能テアルカラテアル。若シ加害者トノ共同責任ヲ認ムヘキモノトスルナラハ、結局自己ニ對スル賠償義務ヲ肯定セネハナラヌ不合理ニ陷ラネハナラヌ。從テ被害者ノ過失ハ直チニ、賠償責任ノ基礎ト爲スヘキモノテハナイ。寧ロ加害者ノ賠償責任ニ對スル、一定ノ制限ノ要素トシテ、取扱ハルヘキモノト言ハネハナラヌ。

三、然ラハ加害者ノ賠償責任ヲ決スルニ當リ、被害者ノ過失ハ如何ナル形式又ハ範圍ニ於テ、計算ノ中ニ入レネハナラヌカ。此點ニ付キテハ、二種ノ立法主義ヲ掲ケルコトカ出來ヤウ。一ハ加害者ノ過失ト被害者トノ過失ヲ比較シ、其對等量ニ於テ兩者ヲ相殺シ、若シ加害者ノ過失カ大ナル場合ニ於テ、其賠償責任ヲ認ムヘシトノ思想ニ基ク、所謂過失相殺主義デアツテ、他ハ被害者ノ過失カ、損害ノ原因トナレル場合ニ於テハ、常ニ其損害ヲ被害者ノミニ負擔セシメ、加害者ヲシテ、全然責任ヲ免レシメントスル所謂責任免除主義カ是テアル。而シテ前者ハ吾民法ヲ始メ獨、佛等羅馬法系諸國ノ法律ノ採用スル所デアツテ、後者ハ英米法ノ助勢過失(Contributory negligence)ノ原

則カ、之ニ該當スルノテアル。而シテ過失相殺主義ノ法制ハ、多ク加害者ノ賠償責任ヲ決定スルニ當リ、如何ナル範圍ニ於テ被害者ノ過失ヲ計算ノ中ニ入レネハナラヌカ、即チ相殺ヲ行フヘキ分量ニ付キ、全然裁判所ノ裁量ニ任ネテ居ル。然ルニ責任免除主義ハ、苟モ被害者ノ過失カ損害ノ原因トナレル場合ニ於テハ、常ニ加害者ノ責任ヲ免除シ、何等裁判所ニ斟酌ノ餘地ヲ與ヘナイノテアル。即チ被害者ノ過失ハ加害者免責ノ絶對の原因ト取扱フノテアル。從テ過失相殺主義ハ、相對主義又ハ斟酌主義ト呼ビ、責任免除主義ハ、絶對主義又ハ絶對的免責主義ト名付ケルコトモ出來ヤウ。

三、然ラハ此二主義中、其何レカ最モ合理的テアリ、又實際ノ運用ニ便宜テアラウカ。此點ハ學問上、最モ興味ノ深イ論點テアラネハナラヌ。併シ本稿ニ於テ自分ハ兩主義ニ付キ、其利害得失ノ比較批評論ヲ計劃スルモノテハナイ。本稿ハ單ニ英米法ニ於ケル、助勢過失ノ原理及其適用ヲ紹介スルヲ、目的トシテ居ルニ過キナイ。

併シ極メテ大マカニ、兩者ノ概評ヲ試ムルナラハ、斟酌主義ハ、被害者ノ過失カ如何ナル程度及範圍ニ於テ、加害者ノ賠償責任ニ影響ヲ及ホスカニ付キ、全然裁判所ノ自由裁量ニ委ネテ居ルカラ、最モ彈力性ニ富メル規定ト言ハネバナラヌ。從テ若シ、其運用ノ宜シキヲ得タナラハ、各個ノ場合ニ付キ、常ニ具體的妥當ノ要求ヲ満足セシムルコトカ出來ヤウ。之ニ反シ責任

免除主義ハ、被害者ノ過失ヲ以テ、其程度ノ如何ニ拘ラス、常ニ加害者ノ免責原因ト爲スノテアルカラ、勢ヒ其適用ノ結果ハ劃一的トナリ、當事者ノ係争ヲ防クコトカ出來ヤウ。併シ各個ノ場合ニ付テ見レハ、甚ダ妥當ヲ缺クコトモ少クナイテアラウ。

四、上述スル所ノ兩主義ノ比較ハ、抽象的ナ大體論ニ過キナイコトハ勿論テアル。各國ノ法制ニ付キテ、詳細ナル検討ヲ試ムルナラハ、兩主義カ必スシモ、如斯峻嚴ノ對照ヲ爲シテ居ルモノトハ言ハレナイ。殊ニ英米法ニ於ケル助勢過失ハ、斟酌主義ノ法則ノ下ニ於ケル、所謂被害者ノ過失ト、必スシモ其範圍ヲ一ニスルモノテハナイ。英米法ニ於テハ、被害者ノ過失カ加害者ノ過失ト相競合シテ、損害ノ原因ヲ爲シタ場合ノ凡テヲ常ニ助勢過失トシテ、加害者ノ免責原因ト爲スモノテハナイ。被害者ノ過失カ、加害者ノ過失ト競合シタ場合ニ付キ、種々ノ態様アルコトヲ認メ、更ニ助勢過失トシテ加害者ノ免責原因タルモノト、否ラサルモノトヲ區別シテ、其間ニ別異ノ取扱ヒヲ爲シテ居ル。從テ被害者ノ過失ノ態様ニ付キテハ綿密ナ研究カ爲シ遂ケラレテ居ル。

而シテ斟酌主義ノ下ニ於テモ、實際ニ被害者ノ過失ヲ斟酌相殺スルニ當テハ、必スヤ其過失ノ態様程度、殊ニ加害者ノ過失トノ關係ニ付キ十二分ノ考慮ヲ拂ハネハナラス。即チ所謂相殺ノ標準ニ付キ、幾多ノ指導原理ヲ必要トスルノテアル。從テ英

米法ニ於ケル助勢過失ノ理論ハ、又我民法ノ過失相殺ニ關スル規定ノ運用ニ關シテモ、貴キ示唆ニ富メルモノト言ハネハナラス。即チ此點カ自分カ本稿ヲモノスル所以ノ一テアル。

殊ニ英米法ハ其根本ニ於テ判例法テアル。普通法上ノ各個ノ規定(rule)ハ、之ヲ個々ノ判例ノ集積ニ求メネハナラス。從テ普通法上ノ各個ノ規定ハ其生成ノ過程ニ於テ、法典國ノ各法條トハ、大ニ其趣ヲ異ニシテ居ルモノト言ハネバナラス。

判例ハ各個ノ具體的事案ニ對スル法的判斷ノ結晶テアル。而シテ各個ノ事案ヲ判決スルニ當リテハ——殊ニ其事案ガ、既存ノ判例ニ支配セラレサル、所謂 original precedent (註二)テアルナラハ——裁判所ハ固定的ナ既成概念ニ拘束セラレルコトナク、最モ自由ニ法的正義ニ從ヒ、十分具體的妥當ノ要求ヲ容レルコトカ出來ル譯テアル。而シテ此結晶ノ集積カ、法律ヲ形成スルモノテアルカラ、英米普通法ハ細密ナル原則ニ豐富ナルハ勿論、其各個ノ原則カー々實際ノ試練ヲ經テ來タ、所謂體驗ノ結果ニ外ナラナイ。此點ハ餘リニ概念化サレタ、法典國ノ法條ノ到底及ハサル所テアル。此意味ニ於テ、既ニ行キ詰ラントシテ居ル、概念法學ガ、英米法ノ學風ヲ學フコトニ依テモ、亦新シキ進路ヲ見出シ得ルコトヲ確信スルモノテアル。而シテ又近年來吾法學界ニ勃興シ來レル、判例法又ハ判例研究ノ新運動ハ、正シク此流ニ從フモノト言ハネハナラス。

(註二) Original precedent トハ、既存ノ原則 (existing rule) ナ適用スルニ過キナイ所謂 declaratory precedent ニ對スルモノテ、未タ判例ノ上ニ表ハレナイ new rule ナ説示スル判例ノ謂ニ外ナラナイ。併シ兩者ハ單ニ程度ノ相違ニ過キナイ。各個ノ判例カ夫々 法律進化ノ一過程 テアル以上、純然タル declaratory precedent モナイト同時ニ、純然タル original precedent モ、存スヘキ理由ハナイ。(W. M. Ge'dard's, Elements of English Law P. 24)

五、尙本稿ヲ草スルニ就テ、更ニ一ノ理由ガアル。自分ハ本誌第四卷ニ於テ英國船主責任制度論ヲ計劃シテ居ル。而シテ同稿ニ於テハ、海法ニ於ケル損害分擔ノ原則カ、普通法ノ助勢過失ノ原理ニ其基礎ヲ置キ、且前者ハ後者ニヨリテ幾多ノ制限ヲ、受ケネハナラスコトニ論及セネバナラス。併シ船主責任制度論ニ於テハ、普通法上ノ原則ヲ詳細ニ論述スルコトハ許サルヘキモノテハナイカラ、特ニ稿ヲ改メテ茲ニ普通法上ノ原則ヲ説キ、以テ別稿ニ於テ足ラサル所ヲ、補足セントスルノテアル。

第一章 助勢過失(Contributory

negligence)ノ概念

一、加害者ノ過失ト被害者ノ過失トカ、相競合スル場合ニ於テモ、兩者ノ過失ヲ損害ノ關係カラ見ルトキハ、決シテ其態様ハ同一テナイ。而シテ英米法ニ於テモ、被害者ノ過失カ加害者ノ過失ト相競合シテ損害ノ原因ヲ爲ス凡テノ場合ヲ、助勢過失トシテ取扱フモノデハナイ。從テ助勢過失ノ意義ヲ明ラカニスル爲メニハ、先ヅ過失競合ノ態様ヲ明ラカニシ、然ル上ニテ助勢過失ト然ラザルモノトヲ區別スルコトカ、必要デアアル。

二、而シテ茲ニ過失ノ競合ト言フノハ、被害者ノ過失ト加害者ノ過失トガ、相結合シテ被害者ノ損害ノ原因ヲ爲シタル場合ヲ言フノデアアル。從テ被害者ニ過失ノアル凡テノ場合ヲイフノデハナイ。被害者ノ過失無カリセバ、其損害モ發生セザリシナルベシト認ム可キ關係ノアル場合デナケレバナラヌ。換言スレバ被害者ノ過失ト其損害トノ間ニ、法律上ノ因果關係ノ、存スル場合デナケレバナラヌノデアアル(註一)

註一、Salmonds', Law of Torts, 6th, ed, P. 46

尙ホ茲ニ明ラカニシテ置カネバナラヌコトハ、助勢過失トシテ取扱ハレル被害者ノ過失ハ、必ズシモ加害者ノ過失ニ對シ、

第二次的ノモノタルコトヲ、必要トシナイト言フコトデアル。即チ加害者ノ過失行爲ガ先ヅ第一ニ存在シ、其原因ノ進行中被害者ノ過失カ、介入助勢スルコトコトヲ、必要トナシイ。兩者ノ過失ガ同時ニ存在シ、而モ兩者ガ相結合シテ損害ノ原因ヲ爲ス場合モ、少クナイノデアル。

第一節 過失競合ノ態様

一、被害者ノ過失ガ加害者ノ過失ト競合シテ、損害ノ原因ヲ爲ス場合ヲ、英美法ニ於テハ、其結果トノ關係即チ因果關係ノ方面カラ、三種ノ態様ニ分ケテ觀察セラル、ノガ普通デアル。(註一)

(1)被害者ノ過失モ、損害ノ原因デアルケレ共、若シ加害者ガ相當ノ注意ヲ用ヒタトシタナラバ、其損害ヲ避け得ベカリシモノト認ムベキ場合。

(2)加害者ノ過失モ損害ノ原因デアルケレ共、若シ被害者ノ側ニ於テ相當ノ注意ヲ拂ヒタリトセバ、其損害ノ發生ヲ避け得ベカリシモノト認ムベキ場合。

(3)加害者及被害者双方ノ過失ガ共ニ、損害ニ對シ不可分的原因關係ヲ有スル場合、即チ加害者ノ注意ノミヲ以テ全然之ヲ避クルコト能ハズ、又被害者ノ注意ノミヲ以テモ、之ヲ避クルコトノ出來ザル場合。

(註一) Roscoe's Adminalty practic, p. 85

Underhill's Law of Torts, 10th, ed, p. 177 以下、

Salmond's Law of Torts, 7th, ed, p. 34 以下

以下設例ヲ以テ之ヲ説明シテ見ヤウ。

(1)被害者ノ過失ニ拘ラズ、若シ加害者ガ相當ノ注意ヲ用ヒタトシタナラバ、其損害ヲ避ケ得ベカリシ場合ノ例。

(a)一八七三年ノ Gee v. Metropolitan Rly. co 事件(註二)

被告會社ノ汽車ニ乗客タリシ原告ガ、車窓カラ外部ノ景色ヲ眺メ様トシテ窓戸ニ倚リ懸ツタ所ガ、其窓戸ノ取付カ不完全デアツタメ外部ニ倒レ、原告モ其窓戸ト共ニ車外ニ投出サレテ怪我ヲシタ。而シテ其窓戸ノ取付ノ不完全デアルコトハ、一寸注意スレバ判ル程度ノモノデアツタ。此事案ニ於テノ窓戸ノ取付ノ不完全デアツタコトハ、被告鐵道會社ノ過失デアル。併シ若シ、原告カ其窓戸ニ少シノ注意ヲ拂ヘバ不完全ナルコトガ、判明スベキデアルカラ、原告ガ其注意ヲ爲サズシテ、怪我ヲスルニ至ツタコトハ、確カニ原告ノ過失トモ言ヒ得ル。併シ原告ノ過失ニ拘ラズ、被告サヘ通常ノ注意ヲ拂ツタナラバ、原告(被害者)ノ損害ハ當然避ケ得ヘカリシモノデアル。ソコデ此事案ハ被告ニ全額賠償ノ責アリトセラレタ。(註三)

(註三) Salmokd's Law of Torts, 6th, ed, p. 36.

(b) 一八四二年ノ Davies v. Mann 事件、

原告が不注意ニモ彼ノ驢馬ノ前肢ヲ縛シテ、道路上ニ繫イテオイタ。所が被告ハ車ヲ馳リ來テ、被告ノ驢馬ヲ轢殺シタ。此場合ニ於テモ、原告ノ過失ナカリシセバ其損害ハ發生シナカッタコトハ勿論デアル。例シ被告ガ相當ノ注意ヲ拂ツタナラバ、當然其損害ヲ避ケ得ベカリシトハ明白デアル。

此事案ニ於テモ被告ニ全額賠償ノ責アリト判決セラレタ。

(註三) Salmond's Law of Torts, p. 33

F. Pollock's The Law of Torts, 12th, ed, p. 470

Underhill's Law of Torts, 10 th, ed, p. 179

(2)加害者ノ過失ニラ拘ズ、被害者ニ於テ相當ノ注意ヲ爲シタリトセバ、其損害ヲ避ケ得ベカリシ場合ノ例、

(a)一八〇九年ノ Butherfield v. Forrester 事件(註四)

被告ガ不法ニ道路上ニ、電柱ヲ横ヘテオイタ。原告ハ夕刻馬ヲ走セ來テ、其電柱ニ衝突シ、爲メニ落馬シテ怪我ヲシタ。其時刻ハ黄昏時デアッタケレ共 100 ヤードノ先カラ、其障碍物(電柱)ヲ認メ得ル程度ノ明ルサハ十分アツタ。(八月午後八時頃)此事案ニ於テ、勿論被告ガ道路上ニ電柱ヲ横ヘテ置イタコトハ、過失デアルケレ共、若シ原告ニ於テ馬ヲ馳ルニ際シ、其前面ニ相當ノ注意ヲ拂ツテ居タトシタナラバ、容易ニ其障碍物ヲ認メルトガ出來タノデアルカラ、衝突モ容易ニ避ケ得ベカリシ筈デアル。此事案ハ以上ノ理

由ニヨツテ被告ニ責任ナシトセラシタ。

(註五)

(註四) F. Pollock's The Law of Torts, 12th, ed, p. 471

Salmond's Law of Torts 6th, ed. p. 35.

Underhill's Law of Torts, 10th, ed. p. 179

(b)一八八一年ノ The Margaret 號事件 (船舶衝突事件 (註六)

甲船ガ其過失ニ依テ、適當ノ位置ニ碇泊中ノ乙船ト衝突シタ。衝突自體ニツイテハ、乙船ニ何等ノ過失ハナカツタケレ共、乙船ガ其船側ノ不適當ノ位置ニ、錨ヲ吊シテアツタノテ、損害ヲ蒙ルニ至ツタ。而シテ其衝突ハ夜間ニ起ツタノデ、甲船ニ於テハ、乙船ノ吊錨ヲ認ムルコトガ、出來ナカツタ。此事案ニ於テ其衝突ハ甲船ノ過失ニ原因シテ居ルケレ共、若シ乙船ノ錨ノ吊方ガ、適當デアツタナラバ、其損害ヲ避け得ベカリシ筈デアル。

從テ甲船ハ全然損害賠償ヲ求ムルコトハ、出來ナイト判決セラレタ。

(註六) Marsden's Collision's at Sea 8th, ed, p. 25

(3)加害者及被害者ノ過失ガ、損害ノ不可分的原因トナリ、何レカ一方ノ注意ニ依テ、之ヲ避けレントノ出來ナイ場合ノ例、又此種ノ場合ハ之ヲ加害者及被害者ノ共同過失 (Joint negligence of plaintiff and defendant) ト言フコトガ出來ヤウ。(註七)

(註七) Underhill's Law of Torts p. 180

(a) 設例

甲ト乙トガ暗夜双方共何等ノ燈火ヲ携帶セズシテ、反對ノ方向カラ、馬ヲ馳驅シ來ツテ、衝突シ甲ガ怪我ヲシタト想像シヤウ。暗夜ニ燈火ナシニ、公道ヲ馳驅シタ點ニ於テ、甲乙共ニ過失ガアルト言ハネバナラス。而シテ甲者ノ怪我ト甲乙兩者ノ過失トノ間ニハ、離ス可カラザル關係ガアル。詳言スレバ甲ノ怪我ハ、甲獨リノ過失ニヨルモノトモ言ヘヌシ、又乙ノミノ過失ニヨルモノトモ言フコトハ出來ヌ。而モ兩者ノ過失行爲ノ時期ガ同時デアルカラ、兩者ノ内其何レカー方ガ、相當ノ注意ヲ用ヒタトシテモ、他方ノ過失行爲ノ結果タル危險ヲ、避ケ得タテアラウト言フコトハ出來ヌ。即チ兩者共ニ、其損害ノ發生ヲ避ケ得可キ機會ヲ有シナイコトニナル。

此種ノ場合ニ於テ英米普通法(註八)ニ於テハ、乙ハ甲ノ損害ニ對シテ責任ヲ負ハナイ。又一八八七年ノ The Bernina 號事件モ此設例ト同趣旨ニ出テタ判例デアル。

(註九)

(註八) 海上法 (Maritime Law) ニアリテハ 過失者双方ヲシテ、其過失ノ程度ニ應シテ、其損害ヲ分担セシムル所謂損害分担ノ原則 (Rule of division of law) ガ行ハシテ居ル。

註九、Salmond's Law of Torts 6th, ed, p. 41

(b) The greenpoint 號事件(註一〇)

甲乙兩船ガ共ニ見張 (lookout) ヲ附セズシテ、相向ツテ進航

シ來リ、其結果損害ヲ惹起シタト言フ事案デアル。前例ト
 同様ニ其損害ハ、甲乙兩船ノ共同過失ノ結果デアツテ、兩
 者ノ間ニ理論上、到底別異ノ價值ヲ附スルコトハ出來ヌ。

(註一〇) Marsden's, Collisions atsea 8th ed p. 360

上掲三種ノ事例ニ於テ第一種ノ場合ハ、被害者ニ過失ガアツ
 テモ、其損害ハ加害者ノ相當ノ注意ヲ以テ、避ケ得ベカリシモ
 ノデアルトノ理由ノ下ニ、加害者ヲシテ責任ヲ負ハシメ、之ニ
 反シ第二種ノ場合ニ於テハ、被害者ニ於テ相當ノ注意ヲ拂ツタ
 トシタナラバ、其損害ハ避ケ得ベカリシモノデアルトノ理由ヲ
 以テ、加害者ニ責任ナシトシテ居ル。即チ前者ノ場合ニアリテ
 ハ、被害者ノ過失ハ其損害ノ負擔ヲ決スルニ付キ、全然考慮ノ
 中ニ入レテ居ラヌコトニナル。之ニ反シ後者ノ場合ニ於テハ、
 加害者ノ過失ハ、全然之ヲ閑却シテ、被害者ノ過失ノミヲ以テ、
 其損害ノ歸屬ノ根據トシテ居ル。約言スレバ前者ノ場合ニ於テ
 ハ、其損害ヲ、加害者ノ過失ノミニ基クモノト見テ居リ、又後
 者ニアツテハ其損害ハ、被害者ノ過失ノミノ結果デアツテ、加害
 者ノ過失トハ關係ナイモノトシテ、取扱ツテ居ルコトニナル。
 而シテ又第三種ノ場合ニ於テモ、第二種ノ場合ト同様實質ニ於
 テハ、加害者ノ過失ハ被害者ノ過失ト共ニ、損害ノ原因デアル
 ケレ共、法律上ハ其損害ヲ被害者ノミノ過失ノ結果トシテ之ヲ
 取扱ヒ、加害者ニ責任ヲ負ハシメテ居ラス。

二、上述スル所ニ依テ、被害者ノ過失ガ所謂助勢過失トシテ、加害者ノ免責ノ根據トナルノハ、過失競合ノ凡テノ場合ヲ包含スルモノデハナクテ、前掲ノ第二種及第三種ノ場合ニ限ラルベキモノト言ハネバナラヌ。元來 Contributory negligence ナル觀念ハ、其語義カラ言ヘバ、苟モ被害者ノ過失ガ、加害者ノ過失ノ原因力ニ參加シテ、損害ノ原因トナツタ、凡テノ場合ヲ包含スベキモノト、言ハネバナラヌ。併シ狹義ニ於テハ、上掲第二種及第三種ノ場合ノミヲ、指稱スルモノトサレテ居ル。(註一一) 蓋シ Contributory negligence ガ法律上特別ノ研究命題トナルノハ、責任論ニ於テ加害者ノ免責ノ根據トシテ、取扱ハルル結果ニ外ナルヌカラデアル。

(註一一) Salmond's Law of Torts, p. 38

F. Pollock's The Law of Torts, p. 464

第二節 助勢過失ノ範圍及決定標準

一、前項ニ於テ、自分ハ責任論ノ範圍ニ於テ、加害者ノ免責ノ根據トシテ取扱ハルル所謂助勢過失ハ、決シテ過失競合ノ凡テノ場合ヲ包含スルモノデナイコトヲ明ニシタ。然ラバ、如何ナル標準ニ依テ、過失競合ノ場合中、助勢過失ト、然ラザルモノト、區別ヲベキデアラウカ。此所謂助勢過失ノ標準トナルベ

キ、普遍的原理カ、當然ニ要求サレネバナラヌ。

此點ニ於テハ英米學者間及判例ニ於テ、種々ノ見界ガ行ハレテ居ル。而シテ之等ノ見界ハ夫々其内容ニ依テ、最後機會說 (Rule of last opportunity) 直接原因說 (Rule of direct cause) 比較過失說 (Doctrine of Comparative negligence) 及自然的傾向說 (Rule of natural tendency) ニ分ツコトガ出來ル。而シテ最後機會說ハ、更ニ之ヲ、複雑最後機會說 (Complexed rule of last opportunity) 及單純最後機會說 (Simple rule of last opportunity) トニ分ケルコトガ出來ヤウ。

第一款 最後機會說 (Rule of last opportunity)

第一、複雑最後機會說 (Complexed rule of last opportunity)

一、此主義ノ要諦ハ、助勢過失ノ根據ヲ被害者カ相當ノ注意ヲ以テ、加害者ノ過失ノ結果ヲ避ケ得ベキ機會ヲ、有シテ居タカ、如何カニ求メントスルノデアル。換言スレバ、被害者ノ蒙ツタ損害ニ付キ、加害者及被害者中、何人ニ於テ其損害ヲ避ケ得ベキ最後ノ機會ヲ有シテ居タカ究メ、而テ(1)若シ被害者ニ於テ、コノ機會ヲ有シテ居タ場合ニ於テハ、被害者ノ過失ヲ以テ、助勢過失トシテ加害者ヲシテ責任ヲ免レシメ、之ニ反シテ(2)若シ加害者ニ於テ、コノ最後ノ機會ヲ有シテ居タ場合ニ於テハ、被害者ノ過失ニ拘ラズ、加害者ノミニ責任ヲ負ハシメントスル

ノデアル。今具體的ノ事案ニ就テ此原則ノ論理的發展ノ跡ヲ驗ヘテ見ヤウ。

二、一九一六年ノ British Columbia Electric Railway Company v. Loach 事件 (以下 Loach 事件ト稱ス)ハ、加害者ガ最後ノ機會ヲ持テ居タト言フ例デアル。該事件ハ原告(被害者)ガ、馬車ヲ驅ツテ被告會社ノ電車線上ニ來リ、被告會社ノ電車ニ依テ、轢殺サレタ事案デアル。而シテ、電車ニ注意セズシテ、線路上ニ這入ツタコトハ、原告ノ過失デアルケレ共、異常ノ速力ヲ以テ電車ヲ走ラセタコト及電車ノブレーキ(Brake)ガ不完全デアツタコトハ、被告會社ノ過失ナリト認定セラレタ。電車ノ運轉手ガ始メテ、原告ヲ認メタトキハ、原告ハ線路カラ、十呎乃至十二呎ノ位置ニアツタ。又運轉手ハ線路ニ近ヅキツツアル原告ヲ、認メルト同時ニ、ブレーキヲカケタ。而シテ、當時電車ハ踏切カラ、四百呎ノ距離ニアツタノデアル。元來其ブレーキガ、完全デアツタトシタナラバ、三百呎以內デ停車セシムルコトガ出來得ベキ筈デアル。然ルニ其電車ハ偶々ブレーキガ不完全デアツタ爲メニ、四百呎モ走ツテ、尙停車セズ遂ニ踏切マデ來テ原告ヲ轢殺スルニ至ツタノデアル。以上ノ事實ニ依テ、原告ノ死ト言フ結果ハ電車ニ注意セズニ、線路内ニ、這入ツテ來タト言フ、原告自身ノ過失行爲トノ間ニモ、因果關係ヲ認ムルコトガ出來ヤウ。併シ原告ノ過失ノ結果タル轢殺ハ、被告會社サ、完全ナブレーキヲ備ヘテ居タナラバ、當然避ケ得ベカ

リシモノデアル。即チ其結果ノ發生ヲ防ギ得ベキ最後ノ機會ハ被告會社ガ有ツテ居ツタト言フコトガ出來ル。然ルニ被告會社ハ、此最後ノ機會ヲプレーキノ不完全ト言フ過失ニ依テ、利用スルコトガ出來ズ、遂ニ轢殺ノ結果ヲ生ズルニ至ツタモノデアル。從テ此事案ハ *puviy council* ニ於テ、被告會社ニ賠償ノ責任アリトセラレタ。(註一)

(註一) *Salmond's Law of Torts*, p. 42

F. Pollock's The Law of Torts, P. 465,

Underhill's Law of Torts, P. 179,

三、一八四二年ノ *Davies v. Mann* 事件ハ被告(加害者)ガ、最後ノ機會ヲ有ツテ居ツタ典型的ノ事案デアル。此事案ハ前ニ詳述シタ通り、原告ガ其驢馬ノ前肢ヲ手綱デ縛シテ路上ニ繫イテアツタ所ガ、被告ガ馬車ヲ驅リ來テ、其驢馬ヲ轢イタト云フ事案デアル。路上ニ驢馬ヲ繫イテオイタコトハ、勿論原告ノ過失デアツテ、又其過失ガナカツタナラバ、轢殺サレルニ至ラナカツタコトモ明白デアル。併シ又被告ガ、車ヲ驅ルニ當ツテ、相當ノ注意ヲ拂ツテ居タトシタナラバ、原告ノ驢馬ヲ轢殺スル筈ハナイ。即チ損害ノ發生ヲ防ギ得ベキ最後ノ機會ハ、被告側ニアツタノデアルカラ、被告ハ原告ニ過失アリシコトヲ理由トシテ、責任ヲ免レルコトハ出來ナイ。尙此事件ニ於テハ其判決ノ理由ヲ敷衍シテ、原告ノ驢馬ノ繫場所ガ悪カツタトシテモ、被告ハ通路ヲ通行スルニ當ツテ、損害ノ發生セヌ様

ニ、相當ノ注意ヲ拂ハネバナラス。若シ然ラズトセバ、何人ト雖モ、路上ニ不法ニ置カレタ物品ヲ轢懷シ、又ハ路上ニ寢倒レテ居ル人ヲ轢殺シテモ、差支ヘナイト言フコトニナラネバナラス。尙極端ニ此論理ヲ進メルナラバ不法ニ路上ニ在存スル物又ハ人ニ故意ニ衝突シテ破懷又ハ殺傷シテモ、責任ヲ負フベキデナイト言フ結論ニ到達セネバナラス。併シ此結論ノ到底是認スベカラザルコトハ言フ迄モナイト言テ居ル。(註二) 而シテ此事件ハ被害者ニ過失ガアツテモ、加害者ニ於テ相當ノ注意ヲ以テ損害ノ發生ヲ避ケ得ベキ機會ヲ、持ツテ居タ場合ニ於テハ、被害者ノ過失ヲ以テ Contributory negligence (廣義) トナシ之ヲ理由トシテ、加害者ハ責任ヲ免ルコトハ出來ヌ。換言スレバ被害者ノ過失カ助勢過失トシテ、加害者ノ免責理由トナルノハ、被害者ニ於テ其損害ノ發生ヲ、避ケ得ベキ最後ノ機會ヲ有シテ居タ場合ニ限ルト言フ原則ヲ始メテ設定シタ第一ノ判決デアル。故ニ Contributory negligence ニ對スル前記ノ制限ハ rule in *Davies v. Mann* ト名付ケラレテ居ル。(註三) 上述ノ如ク rule in *Davies v. Mann* ハ助勢過失ノ原則ニ對シ最モ基本的ノモノデアルカラ、更ニ該原則ノ適用例ヲ一二掲ゲテ見ヤウ。

(註二) *Salmond's Law of Torts* p 38—39

(註三) 同上

四、一八七六年ノ *Radly v London & N.W. Rly. co.* 事件ニ

於テモ House of Lord ニ依テ rule in Davies v. Mann カ適用セラレタ。被告鐵道會社ハ、原告(炭坑主)ノ側線(siding line)カラ貨物ヲ積載セル貨車ヲ取り、而シテ其空車ヲ又其側線ニ反シテ置ク習慣デアッタ。其側線ノ上ニハ、高サ八呎(地上ヨリ)ノ橋ガ懸ケテアッタ。或土曜日ノ午後、被告鐵道會社ハ炭坑ノ就業時間ガ終ツテカラ、其側線上ニ數輛ノ空車ヲ入レテ置イタ。而シテ貨車ノ一ツニハ破壊シタル車輛ガ、積ンデアッタノデ、其高サハ地上カラ一呎ニ達シテ居タ。原告ノ使用人ノ一人ハ、側線上ニ被告會社ガ、數輛ノ空車ヲ入レテアッタコトヲ知ツテ居タケレ共、之ヲ片付ケルコトヲシナカッタ。尙原告ノ側デハ、間モナク被告會社ガ其側線ニ、他ノ列車ヲ入レルコトモ、知ツテ居タ。其翌日ノ日曜日ノ夕刻ニ至ツテ被告會社ハ、其側線上ニ更ニ他ノ空列車ヲ入レタ。所ガ其前日ニ入レテアッタ前記ノ列車ガ、依然トシテ其側線ニアッタノデ、新ニ入レタ列車ノ爲メニ押サレル様ニナツタ。運轉手ハ其際多少ノ抗抵ヲ感シタケレ共、構ハズ進行ヲ續ケタ。併シ破損車輛ヲ積載シテ居タ貨車カ、橋ノ下ヲ通過スルコトガ出來ズ、遂ニ其橋ヲ破壊スルニ至ツタトイフ事案デアル。

上記ノ事實ニ於テ被告會社ノ運轉手が、前面ニ注意ヲ拂ハズニ、運轉ヲ續ケタコトハ勿論過失ト言ハネバナラヌケレ共、併シ原告側ニ於テハ、其側線上ニ被告會社ヲシテ、他ノ列車ヲ入レシムルタメニ、其以前ニ入レテアル列車ヲ速ニ片付ケル義務

ガアツタ。少クトモ橋ノ下ヲ通過スルコトノ出來ヌ、車輛ダゲデモ、片付ケテ置カネバナラナカツタ。此點ニ於テ原告ニモ過失ガアリ、而モ原告ノ此過失サヘナケレバ、其損害ハ發生シナカツタ譯デアル。此理由デ被告會社ハ賠償ノ責任ナシトセラレタ。(註四)

(註四) Salmond's Law of Torts, p. 39

F Pollock's The Law of Torts, p. 466

Underhill's Law of Torts, p. 178

五、又一八〇九年ノButterfield v. Forrester 事件モ、rule in Davies Mann ノ適用例デアル。同事件ハ、既ニ前ニモ示シタ通り、被告ガ、道路上ニ電柱ヲ横ヘテアツタ所ヲ、原告ガ黄昏時ニ馬ヲ驅リ來テ、其電柱ニ衝突シテ、遂ニ怪我ヲスルニ至ツタト言フ事案デアル。即チ原告サヘ相當ノ注意ヲ拂ヘバ被告ノ過失ニ拘ラズ、當然其損害ヲ、避ケ得ベカリシモノデアル。換言スレバ其損害ヲ避ケ得ベキ最後ノ機會ハ、原告側ニアツタトノ理由ノ下ニ、被告ハ賠償ノ責任ナシトセラレテ居ル。

六、上述スル所ノ如ク、rule Davies v. Mann ハ廣義ノ助勢過失即チ凡テノ過失競合ヨリ、狹義ノ助勢過失即チ加害者ノ免責ノ根據トナルベキ、被害者ノ過失ヲ區別スベキ限界デアル。而シテ此原則ハ同事件以來、次ノ如キ抽象的ナ形式ヲ以テ以テ言ヒ表サレテ居タ。“原告ノ助勢過失ニ拘ラズ、被告ノ相當ノ注意ヲ以テ、災害ヲ避ケ得ベカリシ場合ニ於テハ、被告ニ於テ責

任ヲ負ハネバナラス” (The defendant is liable if he could, notwithstanding the contributory negligence of the plaintiff, have avoided the accident by the use of reasonable care)。又一八七八年ノ Radley v. London and North Western Railway Company 事件ニ於ケル Lord Penzance ノ言ヲ借リテ言ヘバ、“假令原告ニ助勢過失アリ、且其過失ガ事實ニ於テ損害ノ原因トナツタトシテモ、若シ被告ガ相當ノ注意ヲ以テ其損害ヲ避ケ得ベカリシ場合ニ於テハ、原告ノ過失ハ被告ノ免責ノ理由トハナラス” (Though the plaintiff may have been guilty of negligence and although that negligence may in fact have contributed to the accident, yet if the defendant could in the result, by the exercise of reasonable care and diligence, have avoided the mischief which happened, the plaintiff's negligence will not excuse him)

然レ共 rule in Davies v. Mann ノ上述ノ formulation バ、極メテ不完全デアルノミナラズ、若シ前記ノ定義ヲ文字通りニ理解スルナラバ、遂ニ所謂狹義ノ助勢過失ノ觀念ヲ、否定スル結果ニ到達セネバナラス。何故ナラバ廣義ノ助勢過失即チ原告及被告ノ過失競合トハ、其双方ノ過失ガ結合シテ、損害ノ原因ヲ爲ス場合ヲ言フノデアルカラ、常ニ被告ノ過失ニ拘ラズ原告ノ過失サヘナカツタトシタナラバ、其損害ハ發生セザリシナルベシト、認め得ベキ場合デナケバナラスカラデアル。從テ

rule in *Davies v. Mann* ハ餘リ廣汎ニ失スルモノト、言ハネバナラス。即チ加害者ノ免責事由トシテノ助勢過失ノ觀念ヲ定ムルニ就テ、前述ノ定義ハ一ノ制約要素ヲ缺如シテ居ルコトニ、氣付カネバナラス。而シテ、最後ノ機會 (last opportunity) ト言フ觀念ハ、此欠缺ヲ補足スルタメニ案出セラレタ命題ニ外ナラナイノデアアル。(註五)

(註五) Salmond's Law of Torts p. 40

八、然ラバ最後ノ機會トハ何ヲ意味スルカ。被加害者ノ過失ト加害者ノ過失ト相結合シテ、損害ヲ發生セシメントスル場合ニ、兩者ノ中何レガ、相當ノ注意ヲ以テ其損害ノ發生ヲ避ケ得ベキ。後ノ機會ヲ有シテ居タカト言フコトニ外ナラス。而シテ原告ガ、被告ヨリモ後ノ機會ヲ有シテ居タ場合ニ、原告ノ過失ヲ以テ助勢過失トシテ、被告ノ責任免除ノ理由トナスノデアアル。

(註六) 尙 Sir Frederick Pollock ノ言ヲ借リテ言ヘバ“原告ノ過失ガ助勢過失トシテ、被告ノ免責ノ事由トナル場合ハ、原告ノ過失ガ因果ノ連鎖ニ於テ、最後ノ階段 (final stage) 且ツ決定的時期 (decisive point) ニ位シテ、其損害ノ直接ノ原因トナツタ場合ニ限ル”ノデアアル。(註七) (plaintiff is not to lose his remedy merely because he has been negligent at some stage of the business, though without that negligence subsequent events might not or would not have happened; but only if he has been negligent in the final stage and at the decisive point of the event, so that

the mischief, as and when it happens, is immediately due to his own want of care and not to the defendant's.)

(註六) Salmond's Law of Torts P. 40

(註七) F. Pollock's The Law of Torts, P 464

九、今最後機會ト云フ要素ヲ容レテ免責事由トシテノ、助勢過失ノ原則ヲ formulatate スルナラバ、次ノ如キ結果トナルデアラウ。“二人ノ過失ガ競合シテ損害ノ原因トナツタ場合ニ於テ、相當ノ注意ヲ以テ其損害ノ發生ヲ避ケ得ベキ最後ノ機會ヲ有シタル者ニ於テ、其損害ノ全責任ヲ負ハネバナラス。”(When an accident happen through the combined negligence of two persons, he alone is liable to the other who had the last opportunity of avoiding the accident by reasonable care) (註八)

(註八) Salmond's Law of Torts, p. 41

一〇、此最後ノ機會トイフ觀念ニ付テ一言セネバナラスコトハ、其機會ハ必ズシモ原告又ハ被告ガ事實上有シテ居タ機會ニ就イテ言フモノデハナイコトデアアル。若シ實際ニ有シテ居タ機會ニ就テ、之ヲ決定スベキモノトスルナラバ、過失ノ結果其機會ヲ失ツテ居タ場合ニハ、其機會ヲ失ツタ過失ハ、全然之ヲ閉却スルト言フ不合理ニ立到ラネバナラス。從テ茲ニ所謂最後ノ機會トハ、過失ナカリセバ有スベカリシ、機會ノ義ナリト解セネバナラス。例ヲ採テ見レバ、此論理ハ一層明白トナルデアラウ。甲ナル駁者ガ泥酔シテ馬車ヲ御シ、馬車ノ進行中遂ニ深キ

睡眠ニ陥ツテ、他ノ馬車ト衝突シタトスル。此場合ニ於テ其衝突ヲ避ケ得ベキ機會ヲ其當時ノ事實ニ就イテ言フナラバ、甲ハ其機會ヲ有シテ居ナカツタト言ハネバナラス。何故ナラバ、甲ハ既ニ睡眠ニ陥ツテ居テ、衝突ノ機會ヲ全然感知シナカツタノデアルカラ、之ニ衝突ヲ避クベキコトハ、望ムベカラザルコトデアルカラデアル。併シ泥酔シテ馬車ヲ驅ルコトガ、既ニ過失デアツテ而シテ其過失ガナカツタトシタナラバ甲ハ當然其ノ衝突ヲ避ケ得ベキ機會ヲ有シテ居タ筈デアル。又前掲ノ British Columbia Electric Railway Company v. Lcach 事件ニ於テモ同様デアル。電車ノブレーキハ不完全デ、到底四百呎以内デ停車スルコトハ不可能デ、從テ事實上電車ハ轢殺ヲ避ケ得ベキ機會ヲ、有シナカタト言ハネバナラス。寧ロ其機會ハ原告側ニ於テ、可能デアツタト言ハネバナラス。併シ電車ガ其機會ヲ有シナイノハ、ブレーキガ不完全デアルタメデ、而シテブレーキノ不完全ナル電車ヲ、運轉スルコトハ過失デアツテ、其過失サヘナケレバ、電車ハ當然其機會ヲ持ツテ居タト言ハネバナラス。

最後ノ機會ヲ上述ノ如ク理解スルナラバ、加害者被害者双方ノ過失ガ、時間的ニ前後ノ關係ナク、同時ニ競合シタ場合 (Coincident in time) ノ問題モ容易ニ解決スルコトガ出來ヤウ。例之夜間反對ノ方向カラ相向ノテ燈明ナシニ、自轉車ヲ走ラセ來ツテ、衝突シタ場合ノ如キガソレデアル。此場合ニハ事實

上何レノ側ニ、其衝突ヲ避ケ得可キ最後ノ機會ヲ有シテ居タカ
ヲ、決定スルコトハ困難デアル。併シ暗夜ニ燈明ナシニ、自轉
車ヲ驅ルコトガ既ニ過失デアル。此過失サヘナカリシモノナラ
バ、衝突ハ避ケ得ベカリシモノデアル。併シ此點ハ双方ニ對シ
テ、同様ニ言ヒ得ルコトデアルカラ、双方共ニ最後ノ機會ヲ有
シテ居タコトニナツテ、何レモ相手方ノ助勢過失ヲ理由トシテ、
其責任ヲ免レ得ルコトニナルノデアル。(註九)。

(註九) Salmord's Law of Torts, p. 41

一一、尙此最後ノ機會ニ付イテ考ヘネバナラスコトハ、當事者
ノ危險認識ノ問題デアル。先ヅ加害者(被告)ノミガ、危險ヲ認
識シテ居タ場合ニ就イテ考ヘテ見ヤウ。例ヘバ電車運轉手が、
其電車ノ前面ヲ横切ラウトスル歩行者ヲ認メ、而シテ其歩行者
ハ電車ノ來ルコトニ氣付ナカッタトシヤウ。然ルニ運轉手ハ停
車ノ餘地ガアツタニ拘ラズ、依然トシテ進行ヲ續ケ遂ニ其歩行
者ヲ轢殺スルニ至ツタトシヤウ。此場合若シ其歩行者ガ注意シ
テ電車ニ氣付ケバ最後ノ瞬間ニ於テ踏ミ止ツテ、電車ヲ避ケ得
ベキ所謂最後ノ機會ヲ有シテ居タト言ヒ得ヤウ。從テ所謂最後
ノ機會ハ歩行者側ニアツタト言ハネバナラス。併シ事實ニ於テ
危險ヲ認識シテ居タノハ電車側デアルニ拘ラズ、歩行者ガ不注
意ノ爲メ其最後ノ機會ヲ、利用シナカッタト言フコトヲ理由ト
シテ、電車側ノ責任ヲ免除スルコトハ果シテ妥當デアラウカ。
此點ニ付イテ判例ハナイ様デアルケレドモ、最後ノ機會ノ原則

ニ對シテ例外ヲ設ケ、被害者ニ最後ノ機會ヲ利用セザリシ過失ガアツタトシテモ、其危險ヲ認識セシ加害者ニ責任ヲ負ハシメルコトガ正當デハアルマイカ。(註九)

(註九) Salmond's Law of Torts, p. 44

一二、次ニ考ヘネバナラヌコトハ、加害者(被告)ガ危險ヲ認識セズ、又ハ認識スルコトヲ得ザリシ場合ニ於ケル、最後ノ機會ノ問題デアル。今甲ガ路上ニ不法ニ其驢馬ヲ繫キ、又乙モ之ヲ知ラズニ馬車ヲ監視ナシニ、同一ノ路上ニ繫イテオイタ。所ガ乙ノ馬ガ物音ニ愕イテ暴レ狂ツテ、甲ノ驢馬ヲ轢殺シタト想像シテ見ヤウ。此場合ニ於テハ双方ニ過失ガ(in pari delicto)アルト言ヒ得ルケレ共、併シ時間的ニ見レバ、其損害ヲ避ケ得ベキ機會ハ後ニ馬車ヲ繫イタ乙ニ、アルモノト言ハネバナラヌ。又駁者甲ガ泥酔シテ馬車内ニ寢込ミ、同ジク泥酔ノ結果路上ニ寢込シテ居ル乙ヲ、轢殺シタト假定シヤウ。此場合ニハ何レモ危險ヲ認識シテ居ナイ。若シ強イデ、有セザル可カラザリシ後ノ機會ヲ、時間的ニ追及スルナラバ、甲乙兩者中其何レカ先キニ酔倒レタカニ依ツテ、決定セネバナラヌ。併シ其何レモ餘リニ機械的デ、又加害者ニ探リ、過酷ニ失スルモノト言ハネバナラヌ。何故ナラ危險ノ存在ヲ知ラス又ハ知り得ザリシニ拘ラズ、其危險ヲ避ケ得ベキ機會ヲ利用セザリシモノトシテ、責任ヲ負ハサネバナラヌコトニナルカラデアル。

茲ニ於テ助勢過失ノ標準トシテノ最後ノ機會ハ、當事者ガ、

危険ヲ認識シ、又ハ認識シ得ベカリシ場合ニ於テ、有セザルベカラザル機會ノ義ニ解セネバナラス。加害者ハ被害者ノ過失ニヨリ生ズルニ至リシ危険ノ存在ヲ知ラズ、又ハ知り得ザル機會ヲ利用セザリシ場合ニ於テ、責任ヲ負フベキモノデハナイ。從テ前掲二個ノ設例ニ於テモ、甲ハ乙ニ對シテ責任ヲ負フベキ限リデナイ。

一三、上述ノ如ク最後機會ノ原則ハ、其適用ニ當ツテ幾多ノ制限ヲ設ケネバナラスコトトナリ、甚ダ紛糾ヲ免レ難イ。茲ニ於テ此複雑極マル原則ヲ捨テテ、單純の確ナ標準ヲ把促シヤウト言フ試ガナサレテ居ル。即チ單純最後機會說 (Simple rule of last opportunity) モ其一デアアル。

第二、單純最後機會說 (Simple rule of last opportunity)

一、助勢過失ノ原則ヲ單純化サナケレバナラスト言フ要求ハ、深イ理論的根據ニ基クモノデハナク、寧ロ陪審制度ノ必要上カラ來ルモノデアアル。何故ナラ助勢過失ノ問題ハ、陪審員ニ依テ決定セラルル事實問題デアツテ、而シテ元來陪審員ハ、法律的知識ニ乏シイ素人デアルカラデアアル。素人タル陪審員ノ適用スベキ原則ハ、須ク簡單ニシテ常識的デナケレバラヌ。即チ餘リニ technical ニ失シテハ、到底之ヲ精確ニ運用スルコトガ出來ヌコトニナラネバナラス。

而シテ單純最後機會說ニ依レバ、助勢過失ニ關スル原則ハ、

次ノ如クニ formulate スルコトガ出來ヤウ。“加害者（被告）ガ、原告ノ過失ニ依テ惹起セラレタル、危険ノ存在ヲ認識セザルヘカラザル時期以後ニ於テ、事實上相當ノ注意ヲ以テ其損害ノ發生ヲ避ケ得ベキ機會ヲ有シタル場合、又ハ若シ其者ニ於テ過失ナカリセバ、當然其機會ヲ有スベカリシ場合ニ於テハ、加害者ハ被害者（原告）ノ過失ニ關係ナク其損害ニ付キ責任ヲ負ハネバナラス。”(Notwithstanding the contributory negligence of the plaintiff, the defendant is liable if at any time after he know, or ought to have known, of the danger caused by the plaintiffs' negligence, he still had an opportunity of avoiding the accident by due care, or would have such an opportunity if he had not disabled himself by his own negligence) (註一)

(註一) Salmond's Law of Torts, p. 45

二、併シ前記ノ見界ニ依レバ、助勢過失ノ最モ典型的ノ例トモ言フベキ、反對ノ方向カラ自轉車ヲ驅リ來ツテ、衝突シタ様ナ、所謂同時過失 (Simultaneous negligence) ヲ除外セネバナラス、不都合ヲ生ズル。如何トナレバ單純最後機會說ニ依レバ、被告ノ最後ノ機會ハ、時間的ニハ原告ノ過失ノ結果タル危険ノ存在ヲ認識シタル後ニ存スルコトヲ、必要トスルケレ共、同時過失ノ場合ニ於テハ、相手方ノ過失ノ結果タル危険ノ存在

ヲ認識シタル後ノ機會ト言フ觀念ヲ容レル餘地ガナイカラデア
ル。(註二)

(註二) Salmond's 同 上

第二款 直接原因説 (Rule of direct cause)

一、最後機會説ガ助勢過失ノ根據ヲ、損害ノ發生ヲ避クベキ
機會ニ求ムルニ反シ、直接原因説ハ其機會ノ有無又ハ前後ト言
フコトニ關係ナク、兩者ノ過失ノ損害ニ對スル原因力ニ依テ之
ヲ決セントスルノデアアル。即チ加害者及被害者兩者ノ過失中、
其損害ニ對シ直接ノ原因ヲ爲シタ者ヲシテ、責任ヲ負ハシメ、
而シテ若シ被害者ノ過失ガ、損害ノ直接原因ヲ爲シタ場合ニ於
テハ、假令加害者ノ過失トノ間ニ原因結果ノ關係ガアツテモ、
被害者ノ過失ヲ以テ助勢過失トシテ、加害者ノ責任ヲ免除セン
トスルノデアアル。(註一)(註二)

(註一) Salmond's Law of Torts, p. 45

F. Pollock's, The Law of Torts p. 463 以下

Underhill's Law of Torts, p. 178

(註二) In order that a man's negligence may entitle another to remedy
against him, that other must have suffered harm whereof this
negligence is a proximate or direct cause (pollock's p. 463)

二、此説モ助勢過失ニ關スル原則ノ、單純化ノ要求カラ出タ
モノデアツテ、而シテ原因ノ直接 (direct) ト言フコトヲ表ス爲

メニ、proximate cause, immediate cause, decisive cause, real cause, effective cause 等ノ語ガ用ヒラレテ居ル。從テ茲ニ所謂直接原因説ハ、或ハ近因説、決定的原因説、直接原因説有效原因説等ト呼ブコトモ出來ヤウ。

併シ之等ハ單ニ形容詞ノ相違ニ過ギナイノデアツテ、決シテ其根本ノ思想ヲ異ニシテ居ルモノデハナイ。(註三) 殊ニ proximate cause ナル語ハ判例ニ於テモ其例ニ乏シクナイ。併シ sir Frederick Pollock ハ proximate cause ナル語ヲ精確デナイト爲シ、其著 The Law of Torts ノ第一版ニ於テハ、Decisive cause ナル語ヲ用ヒ、又第二版以後ニ於テハ direct cause ナル語ヲ用ヒテ居ル。(註四)

而シテ Pollock ガ proximate ナル語ヲ排斥スル理由ハ、元來 proximate cause ナル語ノ一般ノ用例ニ從ヘバ、結果ニ最モ接近シタ原因ト言フコトデアルカラ、若シ被告ノ過失ト、結果トノ間ニ、原告ノ過失ノ介入シタ場合ニハ、常ニ原告ノ過失ガ近因トナリ、其結果遂ニ助勢過失ノ問題ヲ生ズル餘地ガナイ様ニナルカラト言フコトニアル。(註五)

(註三) Samond's Law of Torts p. 45

(註四) F. Pollock's The Law of Torts, p. 463

(註五) F. pollock's 同 上

三、用語上ノ争ハ、兎モ角トシテ先ヅ、直接原因主義ノ適用

ヲ、具體的ノ例ニ就テ驗ベテ見ヤウ。

此ノ直接原因主義ノ原則ヲ最モ能ク説示シタモノハ、一八五八年ノ Tuff v. Warman 事件デアル。同事件ハ原告ノ舢舨 (barge) カ、テームス河ニ於テ汽船ト衝突シテ、沈没シタコトヲ理由トシテ、其汽船ノ水先人ニ對シテ提起セラレタ訴訟デアッタ。而シテ其舢舨ニ見張人 (lookout) ガナカツタコト、及ビ其汽船ハ其舢舨ト容易ニ替リ行ク (Creare) コトガ出來タノニ、之ヲ爲サナカツタト言フ點ニ於テ、双方共ニ過失ガアツタ。同事件ニ於テ被告ハ、原告ノ見張ヲ付セザリシ過失ヲ、助勢過失トシテ免責ノ抗辯トシタ。之ニ對シ判事 Willes ハ、陪審員ヲシテ其ノ過失ガ、衝突ノ直接原因ヲ爲シタカ、否カ、(Whether it "directly contributed to the accident") ヲ判定セシメタ。即チ被害者ノ過失ガ損害ノ直接原因 (direct Cause) タル場合ヲ、助勢過失ト爲サントシタノデアル。

四、然ラバ此直接原因トハ、各個ノ過失行爲ト其結果ニ對スル物理的原因力ニ付キテ、之ヲ定ムベキデアラウカ。原因ノ直接ト間接トヲ區別スルコトハ、因果關係論ニ於テモ、最モ困難ナル問題ノ一デアル。然レ共茲ニ直接原因ト言フ觀念ヲ必要トスルノハ、法律上各個ノ行爲ノ、價值判斷ノ標準トナサンガタメデアル。而シテ行爲ノ法律上ノ價值ハ、物理的の原則ニ依テ決定セラルベキデハナイ。從テ茲ニ所謂直接原因ト言フ觀念モ、物理的的原因力ノ觀念ヲ離レテ法律學的即チ目的論的ニ

構成セラルベキモノト言ハネバナラス。殊ニ其過失行爲カ、不作爲 (Omission) デアル場合ニ於テハ、到底物理的原因力ヲ認メルコトハ出来ナイデアラウ。

五、然ラバ如何ナル標準ヲ以テ、所謂目的論的ニ、此直接原因ナル觀念ヲ、構成スベキデアラウカ。此點ニ就テ、sir Frederick pollock ハ、二個ノ原理ヲ指摘シテ居ル。即チ其一ハ“凡ソ、自己ノ過失ニヨリ他人ノ過失ノ結果タル危険ヲ、避クルコト能ハザル状態ニ陥リシモノハ、其者ノ過失ガ他人ノ過失ニ對シ先行的ノモノタルト、或ハ後發的ノモノタルトヲ問ハズ、此他人ノ過失ノ結果ヲ避ケ得ベカリシ場合ニ、之ヲ避ケザリシト、法律上同一ニ取扱ハサルベカラズ” (A person who has by his own act or default deprived himself of ordinary ability to avoid the consequences of another's negligence, whether initial or contributory, is in no better position than if having such ability, he had failed to avoid them) ト言フコトデアアル。換言スレバ若シ相當ノ注意ヲ以テ、他人ノ過失ノ結果惹起セラレタル危険ヲ避ケ得ルニ拘ラズ、之ヲ避ケザル場合ニ於テハ、法律上責任ヲ負ハネバナラヌトスレバ、自己ノ過失ノ結果、之ヲ避クルコト能ハザル状態ニ陥ツタ場合ニ於テモ、同様ニ責任ヲ負ハネバナラス。例之A ト B トカ、夜間反對ノ方向カラ馬車ヲ驅リ來リ、B ハ危険ナ速力ヲ進行シ、A ハ寢テ居タト假定シヤウ。而シテ、先ヅA ハ、B ガ寢テ居ルコトヲ知ラナカツタトシヤ

ウ。此場合ニ於テハ、若シ A ガ寢テサへ居ナケレバ、危険ノ速力ヲ以テ進行シ來レル B トノ衝突ヲ避ケルコトガ出來得タデアラウ。若シ然リトセバ、A ハ其際自分ガ寢テ居タタメニ、其レヲ避ケルコトガ、出來ナイ状態ニアツタコトヲ、理由トシテ、責任ヲ免レルコトハ出來ナイノデアアル。即チ通常 (nomal) ノ状態ニ於テ、其衝突ヲ避ケ得ルニ拘ラズ、之ヲ避ケナカツタ場合ニハ、當然責任ヲ負ハネバナラスノデアアルカラ、自分ノ行爲ニヨリ危険ニ遭遇シタ瞬間ニ、之ヲ避ケルコトノ出來ヌ状態ニ陥テ居タ場合ニ於テモ、亦同様ニ責任ヲ負ハネバナラス。

尙 pollock ノ指摘シテ居ル第二ノ原理ハ“凡ソ他人ガ逼迫セル危険ヲ、避クルコト能ハザル状態ニ陥レルコトヲ、認識シタル者ハ、自ラモ特ニ其事情ニ應ズベク、特別ノ注意ヲ拂ハザルベカラズ” (A person, who had notice of another's inability in time to use care appropriate to the emergency, must be found to use special caution to meet the circumstances.) ト言フコトデアアル。(註六) 上掲ノ設例ニ就テ言ヘバ、若シ B ガ A ノ寢テ居ルコトヲ、知ツテキタナラバ、B ハ A ガ完全ノ能力ヲ有シテ居ル場合ヨリモ、一層高イ程度ノ注意ヲ以テ、其危険ヲ避ケネバナラス。又或ハ道路上ニ狂奔馬ニ遭シタ場合ニ於テ、其馬ノ暴レ出シタコトガ、馬ノ所有者ノ過失ニ因ルカ、或ハ不可抗力ニ依ルカニ依テ、其狂奔馬ヲ避ケルニ就テ拂フ可キ注意ノ程度ノ差等ヲ生ズベキデナイ。苟モ其所有者ニ於テ、其

馬ヲ取り鎮メルコトノ出來ヌ状態ニアル場合ニ於テハ、其原因ヲ詮索スルコトナク、極力之ヲ避ケナケレバナラス。(註七)

(註六) F. pollock's, The Law of Torts, p. 469

(註七) 同 上 p. 469—470

六、而シテ pollock ハ 上掲ノ第一原理ノ下ニ於テ、他人ノ過失ノ結果タル危険ヲ、避クベキ地位ニアルモノガ、自己ノ不注意ニヨリ、其危険ヲ避クルコト能ハザリシ場合ニ於テハ、其者ノ過失ヲ以テ、損害ノ直接原因トナシ、而シテ他人ノ過失ノ結果、危険状態ガ發起セラレタル場合ニ於テ、他ノ者ハ其危険状態ニ應ズベキ、特別ノ注意義務アリトナス、第二ノ原理ヲ以テ、第一原理ノ下ニ於ケル、過失ノ前提トナサントスルノデアアル。今具體的ノ事件ニ就テ其適用ヲ驗ヘテ見ヤウ。

British Columbia Electric Railway Company v. Loach 事件ニ於テ、右ノ第一原理ヲ適用スルコトニ依テ、電氣會社ノ過失ヲ以テ損害ノ直接原因トナスコトガ出來ル。即チ本事件ニ於テハ、電車ノブレーキサへ完全デアレバ、假令被害者ガ線路ヲ横切ツタトシテモ、其轢殺ヲ避ケ得ベカリシ筈デアアル。而シテ電車が、實際ニ於テ其危険ヲ避ケ得ナカツタノハ、全くブレーキノ不完全ナル電車ヲ運轉シタト言フ、自己ノ過失ノ結果ニ外ナラナイ。從テ其過失ハ轢殺ノ直接原因ト言ハネバナラス。

又此理ハ Davies v. Mann 事件、(donkey case) 及 Tuff. v. Wuman 事件ニ於テモ同様デアアル。即チ donkey case 於テ、原告ガ路上

ニ驢馬ヲ繫イテアツタコトハ、勿論過失デアルケレ共、其結果タル危険ハ、被告ガ相當ノ注意ヲ以テ、避ケ得ベカリシ筈デアアル。然ルニ被告ハ、自己ノ過失ノ結果之ヲ避ケ得ザル状態ニ、陥ツタノデアルカラ 被告ノ 過失ハ 損害ノ 直接原因ト言ハネバナラス。又 Taff v. Wuman 事件ニ於テモ、被告ガ、路上ニ、poleヲ横タヘテアツタコトハ、過失デアルケレ共、若シ原告ガ注意ヲ拂ヘバ、其ト衝突スルコトハカ無リシ筈デアルカラ、原告ノ被ツタ損害ハ、原告自身ノ過失ガ其直接ノ原因ヲ爲シテ居ルト言ハネバナラス。

上述ノ例ハ何レモ原告及被告ノ過失ガ相前後シタル所謂 successive negligence ニ、關スルモノデアルケレ共、同時過失即チ simultaneous negligence ノ場合ニ於テモ、亦同一ノ結果ヲ得ルデアラウ。

第三款 自然的傾向説 (Rule of natural tendency)

此説ハ Bigelow ノ提唱スル所デアツテ、同氏ハ助勢過失ヲ以テ、結局因果關係ノ問題トシテ取扱ツテ居ル。即チ同氏ハ因果關係論ニ於テ、自然的蓋然の結果説 (natural and probable consequences rule) ヲ採用シ、此命題カラ逆推的ニ損害ノ原因タル行爲ヲ認定セントスルノデアアル。即チ損害ガ一定ノ行爲ノ自然的結果ト、認ム可キ關係アル場合ニ於テハ、其行爲ヲ以テ損害發生ノ自然的傾向アルモノトナシ、其行爲者ヲシテ責任ヲ負ハシ

ム可キモノトナスノデアル。

更ニ具體的ニ言ヘバ被害者及加害者双方ノ過失ガ、相競合シテ損害ヲ生ゼシメタ場合ニ於テ、其損害ガ被害者ノ過失ノ自然的又ハ蓋然的ノ結果ト認メ得ベキ場合ニ於テハ、其法律上ノ原因ハ、被害者自身ノ過失デアルカラ、被害者ハ之ヲ加害者ノ行爲ニ基クモノトシテ、賠償ヲ求ムルコトハ出來ナイト爲スノデアル。即チ被害者ノ過失ガ、其蒙ツタ損害ヲ生ゼシムベキ自然的傾向(natural tendency)ヲ有シタ場合ニ、其過失ヲ助勢過失トシテ、加害者ノ責任免除ノ理由トナサントスルニ外ナラナイ。(註一)

(註一) Bigelow's, On Torts, p. 369—370

併シ因果關係論ニ於テ、自然的蓋然的結果説ガ、既ニ排斥セラレツ、アル今日、之ヲ以テ助勢過失ノ標準トスベカラザルハ勿論、又此説ヲ以テハ被害者ノ過失ガ、加害者ノ過失ノ自然的結果デアル場合ニ於テ、何故ニ加害者ノ責任ヲ免除セネバナラヌカラ、説明スルコトハ不可能デアラウ。

第四款 比較過失説(doctrine of comparative negligence)

茲ニ所謂比較過失説ハ米國ノ一部ノ州(state)ニ、行ハレテ居ル原則デアツテ、原告ト被告トノ過失ヲ比較シ、若シ原告ノ過失ガ被告ノ過失ヨリモ、其程度が大キイ場合ニ於テ、之ヲ以テ助勢過失トナシ、以テ被告ノ責任ヲ免除セントスルノデアル。(註一)併

シ過失ノ大小ヲ決定スルコトハ、困難デアルノミナラズ假令之ヲ決定スルコトガ出來タトシテモ、過失ノ大ナルモノノミヲ以テ、損害ノ全責任ヲ負ハシメルコトハ必ズシモ合理的デハナイ。

(註一) Bigelow's, On Torts, P. 375

第三節 助勢過失ノ適用範圍

第一款 故意行爲ト助勢過失

一、上述スル所ニ依テ、被害者ノ過失ト加害者ノ過失トカ相競合シタ場合中、被害者ノ過失ガ其損害ニ對シ、如何ナル關係ニアル場合ニ、之ヲ助勢過失トシテ、加害者ノ責任免除ノ事由ト爲スベキカヲ明カニシタ。然ラバ助勢過失ノ觀念ハ、過失競合ノ場合ニ於テノミ、適用セラルベキデアラウカ。或ハ故意行爲ト過失行爲カ、競合シタ場合ニ於テハ、之ヲ如何ニ取扱フベキデアラウカ。

而シテ一方ノ故意行爲ガ、他方ノ過失行爲ト結合シタ場合ハ、加害者ノ故意ト被害者ノ過失行爲トカ、競合シタ場合及ビ加害者ノ過失行爲ト、被害者ノ故意トガ、結合シタ場合トノ二種ニ區別シテ觀察スルコトガ便宜デアル。併シ後ノ場合ハ不法行爲ノ構成上、被害者ノ承諾ト言フ形式ヲ以テ、取扱ハルベキモノデアルカラ、茲ニハ唯前者即チ加害者ノ故意行爲ト、被害者ノ過失行爲トカ、結合シタ場合ノミヲ論述シヤウ。

二、英米法私犯法 (law of torts) ニ於テハ、不法行爲者ハ、其故意行爲 (wilful wrong, malicious doing) ノ結果ニ對シ如何ナル範圍ニ於テ、賠償ノ責ニ任ズベキカニ付、二個ノ原則ガ行ハレテ居ル。即チ其一ハ intended consequences rule デアツテ、他ハ natural and probable consequences rule デアル。

即チ前者ハ凡ソ不法行爲者ハ、其豫見シタル結果 (intended consequence) ニ就イテハ、故意行爲ト其結果トノ因果關係ノ如何ヲ問ハズ、賠償ノ責ニ任ゼザル可カラズト言フ原則デアツテ、後者ハ其行爲者ガ豫見セザル結果 (unintended consequence) ニ就イテ、單ニ其行爲ト自然の蓋然の結果 (natural and probable consequence) ノ關係アル範圍ニ於テノミ、責任ヲ負フベシト言フノデアル。而シテ Contributory negligence ノ抗辯 (defence) ハ加害者ガ豫見セザリシ結果ニ對シテノミ、之ヲ採用スルコトヲ許シ、豫見シタル結果ニ就テハ、假令被害者ノ過失ガ、理論上助勢過失ト爲サレ得ル場合ニ於テモ、加害者ハ之ヲ以テ免責ノ事由ト爲スコトハ出來ヌトサレテ居ル。(註一)尙此點ニ就イテ後章助勢過失ト因果關係論トノ關係ニ於テ詳述シヤウ。

(註一) Salmond's, Law of Torts, p. 35

第二款 第三者ノ助勢過失 (Contributory negligence of third person)

一、前節ニ於テハ被害者自身ノ過失カ、加害者ノ過失ト結合

シテ損害ノ原因ヲ爲シタ場合ヲ論述シタ。併シ過失ノ競合ノ其レノミニ止マラナイ。被害者以外ノ第三者ノ過失ガ、加害者ノ過失ト結合シテ、被害者ノ蒙ツタ損害ノ原因トナルコトモアル。本節ニ於テハ、此種ノ所謂第三者ノ助勢過失ヲ論ジテ見度イト思フ。而シテ第三者ノ助勢過失ハ、被害者ト全然法律關係ヲ有セザル第三者ノ助勢過失、被害者ノ使用人其他被害者ト契約的關係ヲ有スル第三者及監護者ノ助勢過失等ニ分ケテ研究スルコトガ便宜デアル。(註一)

(註一) 使用人又ハ請負契約者ノ如キ、被害者ト一定ノ法律關係ヲ有スル者ナ、第三者ト稱スルコトハ、用語ノ妥當ヲ缺ク嫌ヒガナイデハナイ。

第一項 無關係者ノ助勢過失(Contributory

negligence of third persons)

一、甲ト乙トノ過失ガ、競合シテ其結果、丙ガ損害ヲ蒙ツタ場合ニ於テ、甲及乙ハ丙ニ對シ、其損害ハ他ノ一方ノ過失サヘ競合助勢シナケレバ發生セザリシモノデアル、トノ理由ヲ以テ自己免責ノ抗辯ト爲スコトガ出來ルデアラウガ。又假令全然責任ヲ免除スヘキ根據トナラナクトモ、少クトモ一人デ全責任ヲ負フ可キ限りデナイトノ、抗辯ヲ爲シ得ルデハナカラウカ。誰シモ子供時代ニハ、同様ノ經驗ヲ持ツテ居ルデアラウ。共同デ惡イコトヲシテ、親ヤ教師ニ叱責サレタ場合ニハ、責任轉嫁ノ意味デナクトモ、自分一人デ爲シタノデハナイ、ト言フコトヲ以

テ、辯解ノ事由ニ爲サントスルノデアアル。而シテ其辯解ノ裡面ニハ、自分獨リノ過失デハナイカラ、責任ヲ負フ可キデナイコトヲ意味シテ居ルノデアアル。果タシテ此考ヘ方ハ合理的デアラウカ。又採テ以テ直チニ法律上ノ原理ト爲シ得ルデアラウカ。

此問題ハ法律的ニハ一面ニ於テ、共同不法行爲ノ問題トシテ、他面ニ於テハ因果關係ノ形式ヲ以テ、取扱ハルベキモノデアツテ、茲ニ所謂加害者ノ免責事由トシテ、助勢過失ノ範疇ニ箝入セラルベキモノデハナイ。而シテ共同不法行爲ノ問題トシテハ、共同不法行爲ト被害者トノ賠償責任ノ態様如何（英法ニ於テハ Sevel and joint）及不法行爲者相互間ノ求償權 (contribution) ノ有無其割合如何（英法ニ於テハ原則トシテ求償權ナシ）ノ問題トナリ、又因果關係ノ問題トシテ、因果中斷論ノ形式ヲ以テ取扱ハルルコトナル。併シ本稿ニ於テハ此點ノ論究ハ當然之ヲ避ケネバナラス。

第二項 使用人ノ助勢過失(Contributory negligence of servant or agent)

一、或業務(bussiness)ニ關シ、他人ヲ使用スル者(Master)ハ其業務執行ノ範圍(in the ordinally cause of bussiness or employment)ニ於ケル、其使用人(servant)ノ不法行爲(私犯 tort)ニ付キ、第三者(被害者)ニ對シ選任監督ニ關スル過失ノ有無ニ拘ラズ、自ラ責任ヲ負ハネバナラスコトハ、普通法上ノ一大原則

アル。然ラバ使用者 (master) ガ第三者ノ不法行爲ニ依リ、損害ヲ蒙リ、而モ被害者 (master) 自身ニ助勢過失ナキニ拘ラズ、其使用人 (servant) ニ、助勢過失ガアツタ場合ニ於テハ、其使用人ノ助勢過失ハ、使用者ノ加害者ニ對スル損害賠償請求ニ付キ、使用者自身ノ助勢過失ト同様ニ、加害者側ニ於ケル免責ノ抗辯ト爲シ得ルデアラウカ。

二、抑々使用人ノ不法行爲ニ付キ、其使用者ヲシテ第三者ニ對シ、責任ヲ負ハシムル法律上ノ根據ハ英米法ニ於テハ、之ヲ使用人ノ選任監督ニ關スル使用者自身ノ過失ニ求メネバナラス。

(註一) 即チ他人ヲ自己ノ業務ノ爲メニ使用スル者ハ、其使用人ノ選任解任及其業務ノ執行方法等ニ關シ、自由ノ地位ニ立テ居ルト言ハネバナラス。從テ若シ其選任使用シタル者が、業務執行ノ範圍ニ於テ不法行爲ヲ爲シタ場合ニ於テハ、使用者ハ使用人ノ選任ヲ誤リ、又ハ業務執行方法ノ指揮ヲ誤ツタモノト言ハネバナラス。即チ此點ニ於テ使用者モ過失ノ責ガアルト言ハネバナラナイノデアアル。(註二)

(註一) Salmond's, Law of Torts p. 95

(註二) 使用者ヲシテ、其使用人ノ不法行爲ニ付キ、責任ヲ負ハシムルノハ、上述ノ如キ理論ニ、由來スルモノデアルケレ共、此根據ニ基イテ、法律ハ使用人ノ過失ヲ、絶對的ニ推定シ (absolute presumption) 荷モ、使用人ノ業務執行ノ範圍ニ於ケル不法行爲ニ付イテハ、事實上選任監督ニ關シ過失ノアルト否トヲ問ハス、常に責任ヲ負フヘキモノトシテ居ル。(Salmond's 同上) 從テ此點ハ、英米法ト吾民法七一五條トハ趣ヲ異ニシテ居ルモノト、言ハネバナラス。

上述ノ如ク使用人ノ不法行爲ニ對シ、使用者ニ責任ヲ負ハシムル根據ヲ、使用者自身ノ過失ニ求ムベキモノナラバ、使用人ノ過失ハ助勢過失論ノ範圍ニ於テモ、亦使用者自身ノ過失ト同様ニ取扱バレネハナラス。

從テ加害者ハ使用人ノ過失ヲ以テ、被害者ニ對シ助勢過失トシテ、免責ノ抗辯ト爲スコトガ出來ルト言ハネバナラス。(註三)

(註三) Salmond's, Law of Torts, p. 47

三、而シテ上述ノ原理ハ、他人ノ不法行爲ニ付キ、責任ヲ負ハネバナラス、凡テノ所謂傳來責任 (vicarious liability) ノ場合ニモ、等シク適用スルコトガ出來ヤウ。

即チ妻ノ不法行爲ニ對スル夫ノ責任 (the responsibility of a husband for the torts of his wife,)、各組合員ノ他ノ組合員ノ不法行爲ニ對スル責任、(the responsibility of a partner for the torts of his partner in and about the partnership's bussiness)、及法人ノ役員又ハ使用人ノ不法行爲ニ對スル責任 (the responsibility of a corporation for the torts of its directors and other agents in the conduct of its affairs) 等ニ於テ、夫、組合員及法人ヲシテ責任ヲ負ハシムベキモノ (妻、他ノ組合員、法人ノ役員及使用人) ノ助勢過失ハ、之等ノ者ノ行爲ニ付キ責任ヲ負フベキ者 (夫、組合員、法人) ノ被害者ナル場合ニ於テモ、等シク免責ノ根據トナスコトガ出來ルノデアル。(註四)

(註四) Salmond's, Law of Torts, p. 47

第三項 獨立契約者ノ助勢過失 (Contributory negligence of independant contractor)

一、前項ニ説述シタルガ如ク、或事業ノ爲メニ他人ヲ使用スル者ハ、其使用人ノ過失ニ付責ヲ負ハネバナラナイケレ共、茲ニ使用者 (master) ヲ責任付クル者ハ、使用者ト隸屬的關係ニ立チ、使用者ノ指圖ニ從テ行動スル、所謂使用人ニ外ナラス。從テ請負者ノ如ク、他人ノ事業ヲ遂行スルモノデハアルケレ共、其業務ノ執行ニ付キテ、使用人ノ如ク一々本人ノ指圖ニ從テ、行動スルコトヲ要セザル、所謂獨立契約者 (independant Contractor) ハ當然此原則カラ除外サレネバナラヌ。即チ本人ハ自己ノ業務ノ爲メニ使用スル所謂獨立契約者ノ過失ニ付キテハ、假令其業務ノ執行ノ範圍ニ於テ爲サレタル場合ニ於テモ、自ラ責任ヲ負フベキデハナイ。(註一)從テ之等獨立契約者ノ助勢過失ガ本人ノ蒙リシ損害ニ付キ、免責ノ根據ト爲スコトヲ得サルコトハ言フマテモナイ。(註二)

(註一) Salmond's, Law of Torts, p.
Underhill's, Law of Torts p.

(註二) Salmond's, 同上 p. 47

二、然ルニ英國ニ於テハ一八四九年、Thorogood v. Bryon事件ニ於テ獨立契約者ハ、助勢過失ノ範圍ニ於テ、本人ト同一體トシテ取扱ハルベキモノナリト爲シ、馬車ノ駁者ノ過失ハ乘客自身ノ過失ト同様ニ、其乘客ノ被害ニ對スル助勢過失トシテ、

加害者ノ免責事由ト爲スニ至ツタ。(註三) 而シテ此原則ハ、
doctrine of idenfication ト稱セラレテ居ル。

(註三) F. Pollock's, The Law of Torts, p. 474

Salmond's, Law of Torts, p. 47

Underhill's Law of Torts p. 180

Begelow's On Torts p. 380

三、然ルニ此原則ノ合理性ニ付テハ大ニ疑ノ餘地ガアル。若シ當事者ノ意思ニ、根據ヲ置イタモノトスレバ、事實ニ反スル擬制的ノ理論ト言ハネバラヌ。車ヲ雇入レル場合ニ車夫ノ過失ニ付キ、自ラ責任ヲ負フベキ意思ヲ存シテ居タトハ、到底言ヒ得ザルコトデアル。寧ロ、車夫ノ過失ニ付キ、車夫又ハ其抱主ヲシテ自己ニ對シテ責任ヲ負ハシムベキ、意思ヲ有シテ居タト見ルベキデアル。(註四) 此同一體ノ原則ヲ、設定シタ判事達(Coltman, Maule Cre well 及 E.V. Williams)ハ、原告ハ其損害ノ原因ヲ立證スルニ當リ、被告ノ過失ハ其損害ノ全原因(whole cause)デアルコトヲモ、證明シナケレバナラヌトノ、誤解ニ立脚シテ居タカノ様ニモ解セラレル。何故ナラ、若シ之ヲ肯定スルナラバ、被告ノ過失ガ、損害ノ唯一ノ原因テナイコトガ、被告ニ依テ立證セラレタ場合ニ於テハ、原告ノ請求ハ、當然排斥セララルベキデアルカラデアル。併シ之ガ認論デアルコトハ、説明スルマデモナイ。(註五)

(註四) F. pollock's, The Law of Torts, p. 475

(註五) 同 上

四、上述ノ如ク *doctrine of identification* ハ、到底之ヲ維持シ得ベキ根據ヲ、見出スコトハ困難デアアル。茲ニ於テ乎此原則ハ、其后四十年間モ之ニ準據スル判例ヲ見ルニ至ラズ、遂ニ一八八八年ノ *The Bernia* 事件ニ於テ、*House of Lord* ニ依テ破毀 (*overuled*) セラル、ニ至ツタ。從テ現今英國普通法ニ於テハ、獨立契約者ノ助勢過失ヲ以テ、免責ノ抗辯トナスコトハ、許サレナイモノト言ハネバナハヌ。

(註六) *Salmond's, Law of Torts, p. 47*

Underhill's, Law of Torts, p. 180

第四項 監護者ノ助勢過失 (*Contributory negligence of the custodian of children or disabled persons*)

一、辯別能力ノ乏シイ、又ハ缺如シタ未成年者 (*a child of tender years*)、其他相當ノ注意ヲ要求スルコトノ出來ヌ精神ノ不健全ナル者 (*person incapable of taking ordinary care of himself*) ハ、普通監護者ノ保護 (*in charge or in custody*) ノ下ニアルコトガ普通デアアル。然ラバ之等監護者ノ下ニアルモノガ、第三者ノ過失ニ依リ損害ヲ蒙リ、而モ監護者ノ過失ガ之ニ助勢 (*Contribute*) シタ場合ニ於テ、第三者ハ 監護者ノ助勢過失ヲ以テ、被害者ニ對スル免責ノ抗辯トナシ得ルデアラウカ。此點ニ關スル *authority* ト認ムベキ判例ハ一八五八年ノ *Waite v.*

North Eastern Rly, Co 事件デアル。

同事件ハ被告會社ノ乗客タリシ小供ガ、被告會社ノ過失ニ依リテ怪我ヲシ、而シテ監護者ノ側ニモ、所謂助勢過失ガアツタト言フ事實デアル。此事件ニ於テハ此助勢過失ノ抗辯ヲ採用シ、被告會社ハ被害者ニ對シテ、責任ナキ旨判示セラレタ。(註一) 而シテ此判例ハ、*doctrine of indefication*ヲ廢毀シタ、*The Bernia* 事件ニ於テモ、覆ヘサルルコトナク、寧ロ *Lord Watson* 及 *Herschel* 等ニヨツテ引用セラレテ居ル。從テ現今ニ於テモ監護者ノ助勢過失ハ加害者ノ免責ノ根據トナシ得ルモノト言ハネバナラス。(註二) 而シテ此原則ハ *doctrine of imputability*ト稱セラテ居ル。即チ監護者ノ過失ヲ以テ、被害者即チ被監護者自身ニ歸ス(*impute*)ベキコトヲ、意味スルノデアル。但シ此 *doctrine of imputability*ニ對シテ反對論ガナイデモナイ。(註三)

(註一) *Salmond's, Law of Torts, p. 48*

(註二) *Underhills, Law of Torts. d, 188*

(註三) *Begelows, On Torts p.*

二、被害者ガ監護者ノ保護監視ノ下ニアルト言フ事實ハ、其ノミヲ以テハ、直ニ加害者ノ責任ヲ免除スベキ根據トハナリ得ナイ。併シ監護者ノ保護ノ下ニアルト言フコトハ、結局其被監護者ガ、第一次的ニハ監護者ニ依テ、保護セラレテ居ルコトヲ意味スルモノデナケレバナラス。從テ其被監護者ニ對スル第三者ノ注意義務ハ、ソレ丈輕減セラルベキデアル。詳言スレ

バ、第三者ノ被監護者ニ對スル注意義務ハ、其被監護者ガ、監護者ノ保護即チ注意ノ下ニアルコトヲ前提トスルモノデアルカラ、監護者ノ注意義務ノ範圍ニ於テハ、第三者ハ更ニ二重ニ、注意義務ヲ負フベキデハナイ。之ヲ前記ノ例ニ就テ言フナラバ、被告會社ハ其幼兒ガ監護者ノ保護ノ下ニアルコトヲ條件トシテ、運送ヲ引受ケタモノデアルカラ、其幼兒ニ對スル運送人ノ注意義務モ亦、監護者ノ注意義務ヲ前提トシテ居ラネバナラス。即チ監護者ノ過失ノ存スル範圍ニ於テハ、運送人ニハ——他人ノ監督ノ下ニ立タザル普通人ニ對スル注意義務ノ違反アル場合ハ格別——過失ガナイト言ハネバナラス。從テ結局幼兒ノ蒙ツタ損害ハ、被告會社ノ過失ニ基クモノニ非ズシテ、監護者ノミノ過失ニ基クモノト言ハネバナラス。(註四)從テ此判例ハ純然タル助勢過失ノ問題ニ關スルモノト言フコトハ出來ス。

(註四) Salmond's, Law of Torts, p. 48

尙 pollock ハ此點ニ就キ損害ノ直接原因ハ其監護者ノ過失ナリト説イテ居ル。(The law of Torts p. 474)

三、而シテ被監護者ノ蒙リシ損害ニ付キ、監護者ノ過失ガ第三者ノ過失ト競合シタ場合ニ於テ、第三者ガ責任ヲ負フベキカ否カハ次ノ標準ニ於テ決定セラルベキデアル。(註五)

(1)加害者ノ過失ノ結果、監護者ガ相當ノ注意ヲ以テモ、尙其被監護者ノ損害ヲ避クルコト能ハザルニ至リシトキハ、監護者ノ過失ニ拘ラズ、加害者ニ於テ責任ヲ負ハネバナラス。

- (2) 監護者ガ被監護者ヲ逼迫セル危険ヨリ、其相當ノ注意ヲ以テモ、救フコト能ハザル状態ニ、陥リタルコトヲ、認識シタル場合ニ於テハ、加害者ハ特別ノ注意ヲ拂フコトヲ要シ、若シ其注意ヲ拂ハザリシニ依リ、損害ヲ生ジタル場合ニ於テハ、加害者ハ監護者ノ過失ニ拘ラズ、責任ヲ負ハネバナラヌ。
- (3) 併シ監護者ガ、被監護者ヲ保護スルコト能ハザル状態ニアルコトヲ認識セズ、且相當ノ注意ヲ以テモ、認識スルコト能ハザリシ場合ニ於テハ、加害者ハ單ニ通常人ニ對スルト同一ノ注意ヲ拂フコトヲ要シ、此程度ノ注意ヲナシタル場合ニ於テハ、最早被監護者ノ蒙リシ損害ニ付テ、責任ヲ負フベキデナイ。
- (4) 又監護者ガ、被監護者ノ逼迫セル危険ニ對シ、保護スルコト能ハザル状態ニアルコトヲ、認識シタル場合ニ於テモ、加害者ガ其事情ニ應ズベキ注意 (additional caution reasonably called for in the circumstance) ヲ拂ヒタル場合ニ於テハ、加害者ハ被監護者ノ蒙リシ損害ニ付キ、責任ヲ負フベキデナイ。

(註五) F. pollock's, The Law of Torts, p. 498

第二章 助勢過失ノ法的構成

助勢過失ノ法的構成ハ(1)被害者自身ノ過失ノ性質及(2)被害者ノ過失ガ、加害者ノ不法行爲ノ構成上如何ナル地位ニ於テ取扱ハルベキカノ、二方面カラ論究セネハナラス。

第一節 被害者ノ過失ノ性質

一、法律上過失トハ、注意義務ノ違背ニ外ナライ。即チ過失ハ注意義務ノ存在ヲ前提トシテ居ラネバナラス。從テ法律上注意義務ノ存セザル場合ニ於テハ、假令道德的ニ注意ノ欠缺アル場合ニ於テモ、過失ト言フコトハ出來ヌ。然ラバ茲ニ所謂助勢過失モ、注意義務ノ違背ナリト、言フコトガ出來ルデアラウカ。

二、若シ助勢過失ヲ以テ、法律上ノ注意義務ノ違背ト解スルトキハ、其當然ノ歸結トシテ、各自ハ自分自身ニ對シ、自己ノ安全ノ爲メニ、注意ヲ拂フベキ義務ヲ負フテ居ルモノト言ハネバナラス。併シ自己ニ對スル義務ト言フ觀念ハ、其自體矛盾デアアル。何故ナラ自己ニ對スル注意義務ノ半面ハ、各自ハ自己ニ對シ自己ノ爲メニ、注意ヲ要求シ得ベキ權利ヲ有ス、ト言フコト

ニナラネバナラヌカラデアアル。詳言スレハ權利ト義務トガ、同一人格ニ歸屬シ結局混同ヲ避ケルコトガ出來ヌカラデアアル。

茲ニ於テ所謂被害者ノ助勢過失ハ、通常ノ意義ニ於ケル過失デハナク、注意義務ノ存在ヲ前提トセザル一種特別ノ過失ナリトノ說ヲ生ズルニ至ルノデアアル。(註一) 但シ鳩山博士ハ過失ノ觀念ハ常ニ義務ヲ伴フコトヲ要スルカ否ヤヲ疑ハル。(註二)

- | | | | |
|------|-------|---------|------|
| (註一) | 石坂博士著 | 日本民法 | 三二八頁 |
| | 川名博士著 | 債權法要論 | 二二頁 |
| (註二) | 鳩山博士著 | 日本債權法總論 | 七八頁 |

併シ英國ニ於テハ、自己ニ對スル注意義務ノ存在ヲ、肯定スル學者ハ少クナイ。殊ニ Terry ノ如キハ、自己ニ對スル注意ハ法律上強制スルコトノ出來ヌ性質ノモノデアアルカラ、消滅時效ニカカツタ義務ト同様、不完全義務(imperfect duty)ノ範疇ニ屬スベキモノトシテ居ル。(註三)

- (註三) Terry's, The Common Law, p. 155
Salmond's Law of Torts, p. 35

二、被害者ノ助勢過失ハ、之ヲ法律上ノ注意義務ノ違背ナリトシテ理解スルト否トヲ問ハズ、法律ノ價值判斷ノ基礎トナル點ニ於テハ、同一デアアル。即チ法律ハ、各自ガ自己ノ安全ノ爲メ一定ノ注意ヲナスベキコトヲ、義務トシテ要求セザル迄モ、之ヲ豫想シ又ハ期待シテ居ルト言ハネバナラス。而シテ法律ノ此期待ニ反シタ場合ニ於テハ、法律ハ特ニコノ注意ノ欠缺ニ付

キ、一定ノ效果ヲ付スルノデアアル。

然ラバ法律ハ如何ナル程度ニ於テ、各人ニ對シ自己ノ安全ノ爲メノ、注意ヲ期待スルデアラウカ。法律ハ一面ニ於テ社會ノ各員ニ對シ、他人ノ權利ヲ侵害セザル様、注意義務ヲ課シ、此義務ノ違背アル場合ニ於テ、之ヲ過失 (negligence) ト爲シ、被害者ニ對シテ、一定ノ責任ヲ負シハメテ居ル。從テ法律ガ同時ニ、他ノ半面ニ於テ、各自ノ安全ノ爲メニ、同一程度ノ注意ヲ要求スルモノダト言フコトハ出來ス。何故ナラバ他人カ、既ニ自己ノ權利ヲ尊重シ、之ヲ害セザル様、相當ノ注意ヲ拂フヘキ義務ヲ負ウテ居ル以上、各自ハ他人ガ其義務ヲ履行スベキモノナルコトヲ信ジ、此信賴ニ基キテ安心シテ行動ヲ爲スベキデアソテ、殊更ニ他人ニ害セラレザル様注意警戒セネバナラス必要ハ存シナイカラデアアル。例之鐵道會社ハ其乗客ヲ安全ニ輸送スル爲メニ、相當ノ注意義務ヲ負ウテ居ル。從テ、乗客ニ對シ自己ノ爲メニ萬一ノ場合ヲ豫想シテ、鐵道會社ガ其注意義務ヲ完全ニ履行シタリヤ否ヤ、具體的ニ言ヘハ、運送用具ガ完全セルヤ否ヤ等ヲ檢閲スベキコトヲ要求スベキモノデハナイ。又鐵道會社ハ沿線ノ所謂鐵道火事ヲ防グタメニ、機關車ノ設備等ニ付キ、相當ノ注意義務ヲ負フモノデアアル。併シ沿線ノ住民ニ對シ、機關車ヨリ飛散スル火ノ子ヲ防グベク、常ニ相當ノ義務ヲナスベキコトヲ要求スベキモノデハナイ。從テ助勢過失ニ基礎タルベキ、所謂自己ノ爲メニスル注意義務ハ、決シテ各自ガ

他人ニ對シテ負フ注意義務ト、其範圍ヲ一ニスルモノデハナイト言ハネバナラス。

三、又助勢過失ノ前提タル注意義務ハ、自己ニ對スル義務ニ非ズシテ、他人ニ對スル義務ナリト理解スルコトモ、不可能デハナイ。自己ノ行爲ノ結果、他人ヲシテ其者ノ過失ノ評價ニ付キ、ヨリ惡シキ地位ニ陷レテハナラスト、言フ命題ハ、蓋シ正當デアラウ。即チ自己ノ行爲ガ、他人ノ過失ト競合シタルガ爲メニ、他人ノ過失ノ結果ニ變化ヲ生ジタル場合ニ於テハ、他人ノ責任ハ自己ノ行爲ガ介入セザリシ場合ト、同一デナケレバナラス。自己ノ行爲ガ介入シタルガ爲メニ、其結果ヲ増大セシメタルニ拘ラズ、其他人ノミ獨リ其増大シタ結果ニ對シ、責任ヲ負ハシムベキ理由ヲ認メルコトハ出來ヌ。他人ノ過失ニ介入シテ、其結果ヲ増大セシメタ者ニモ、等シク責任ヲ負ハシメネバナラス。

此命題ヲ肯定スルナラバ、其當然ノ歸結トシテ、各自ハ他人ノ過失行爲ニ介入シテハナラスト言フ、消極的ノ義務ヲ負フモノデアルト言ハネバナラス。而シテ此義務ハ決シテ自己ニ對スル義務デハナク、他人ニ對スル義務ニ外ナラス。又此義務ハ他人ヲシテ、其過失行爲ニ關スル責任ノ評價ニ付、自己ノ行爲ノ結果他人ヲシテ、ヨリ不利益ナル地位ニ陷レテハナラスコトヲ、其本體トナスモノデアルカラ、結局他人ニ對スル注意義務ヲ内容トスルモノデナケレバナラス。

併シ假令他人ノ過失行爲ニ介入セザル様、相當ノ注意義務ヲ負フモノトシテモ、此義務ハ其他人ガ負擔シテ居ル他人ノ權利ヲ侵害セザルベキ注意義務ニ對シテハ、矢張第二次的ノモノトナケレバナラス。何故ナラバ、法律ガ既ニ權利不可侵ノ注意義務ヲ課シテ居ル以上ハ、各自ハ他人ガ不可侵義務ヲ履行スベキモノト、信賴スベキデアルカラデアル。換言スレバ、一般ニ他人ノ過失ヲ推定スルコトハ、法律生活ニ於テ、許サルベキコトトナイカラデアル。例之自働車ヲ運轉スルモノハ、他ノ運轉手モ、等シク取締規則ヲ遵守シ、自己ノ自働車ト衝突セザル様相當ノ注意ヲ拂テ居ルモノト信賴スベキデアツテ、決シテ他ノ自働車ハ、取締規則ニ從ハズ又ハ自己ノ自働車ト衝突センコトヲ、望ンデ居ルモノト推定セネバナラス理由ハナイ。

四、併シ他人ニ對スル此信賴ガ、裏切ラレタル場合、換言スレバ、他人ハ注意義務ヲ遵守スルモノナリトノ、推定ガ破ラレタル場合ニ於テハ、各自ノ取ルベキ態度モ、自ラ異ラザルヲ得ナイ。即チ他人ガ其過失ノ結果、危險ノ存在スルコトヲ警告シタル場合、又ハ他人ガ警告セザルモ自ラ之ヲ認識シタル場合ニ於テハ、各自ハ其危險ヲ避ケネバナラス。危險ノ存在ヲ認識シ乍ラ自ラ之ヲ冒シテ、遂ニ損害ヲ蒙ルニ到リシニ拘ラズ、之ヲ以テ過失ナシト言フコトハ出來ヌ。危險ノ存在ヲ認識シタル以上ハ、其危險ガ他人ノ過失ニ原因シタルカ又ハ不可抗力ニ因ル

カラ問フ必要ハナイ。須ク之ヲ避クベキデアアル。

五、然ラバ危険ノ存在ヲ認識セザル場合ニ於テハ、常ニ助勢過失ヲ否定スベキデアラウカ。若シ助勢過失ヲ以テ、單ニ自己ノ爲メニスル注意義務又ハ他人ノ過失行爲ニ介入スヘカラザル義務ノ違背ナリト理解スルナラバ、上述ノ如ク他人ノ過失ハ之ヲ推定スベカラズトノ命題ノ下ニ於テハ、此問ニ對シテモ、肯定的ニ答ヘネバナラヌデアラウ。

併シ既ニ法律ガ他人ノ安全ノ爲メニ要求スル注意義務ノ違背アル場合ニ於テハ、其過失ガ假令自己ノ爲メニスル注意義務又ハ他人ノ過失行爲ニ介入スベカラザル義務ノ違背ナリト見ルコトガ出來ナイトシテモ、矢張之ヲ助勢過失トシテ取扱フベキデアアルマイカ。例之夜間ニ燈火ナシニ、自働車ヲ驅ルコトハ單ニ其ノミニテハ、自己ノタメニスル、又ハ他人ノ行爲ニ介入スベカラザル注意義務ノ違背ナリト、言フコトハ出來ナイ。併シ、他人ヲ害スベキ可能性ガアル以上、此點カラ言ヘバ確カニ過失ト言ヒ得ル。併シ其過失ハ他人ヲ害セザルベキ、注意義務ノ違背ト言フ、意味ニ於テデアアル。而シテ此過失ノ結果、他ノ過失アル自働車ト衝突シテ、他ノ自働車ニ損害ヲ生ジタ場合ニ於テハ、勿論其過失ノ責ニ任セネバナラヌ。然ルニ偶々其損害ガ、自己ニ付テ生ジタ場合ニ於テ、其過失ガ他人ニ對スル注意義務ノ違背デアアルトノ理由ヲ以テ、自己ノ蒙リタル損害ノ歸屬ニ付キテハ、全然之ヲ考慮ノ中ニ入レテハ、ナラヌトノ理

由トハナラヌ。換言スレバ其損害ガ何人ニ付キテ生ジタカト言フ偶然の理由ノミヲ以テ、同一ノ過失ニ對シ、或場合ニ於テハ之ヲ以テ責任原因トシ、又或場合ニ於テハ何等價值判斷ノ標準トスベカラズト言フガ如キハ、到底是認スベカラザル論理デア
ル。

從テ助勢過失トハ、他人ノ過失行爲ノ結果タル危險状態ヲ、認識シタル場合ニ於ケル其事情ニ應ズベキ注意義務ノ違背ヲ云フノミナラズ、法律ノ要求スル凡テノ注意義務ノ違背、即チ本來ノ意義ニ於ケル過失ヲモ、包含スルモノト解セネバナラヌ。

五、然ラバ助勢過失ノ前提タル注意義務ハ、如何ナル程度ノモノデナケレバナラヌデアラウカ。注意ノ程度ト言フ一般的標準ハ抽象的ニハ通常人 (reasonable person) ノ注意トカ、其他種々ノ觀念ヲ論定スルコトガ出來ヤウ。併シ、一般過失ニ付テ、通常人ノ、通常ノ注意ヲ以テ其標準ヲト爲ス以上ハ、助勢過失ニ付テモ同一デナケレバナラヌ。殊ニ助勢過失ノ爲メニ、更ニ高イ程度ノ又ハ低イ程度ノ標準ヲ、求メネバナラヌ理由ハ存在シナイ。

併シ茲ニ一言セネバナラヌコトハ、通常人ノ通常ノ注意ト言フコトハ、必ズシモ絶對的ノモノデハナイコトデアアル。其注意ノ程度ハ、各場合ノ事情ニ應ジテ、定ムベキモノデアツテ、如何ナル場合ニモ適用シ得ベキ一般の程度ヲ論定スルコトハ不

可能デアル。各場合ニ於ケル事情ヲ參酌シテ之ヲ決定セネバナ
ラヌ。殊ニ他人ノ行爲ノ結果危険状態ニ陥レラレタル場合ニ於
テハ、其特種ノ事情ヲ考慮セネバナラヌ。逼迫セル事情ノ下ニ
於テモ、尙ホ通常ノ場合ニ於ケルト同様ノ注意ヲ要スルコト
ハ、過酷ト言ハネバナラヌ。然ルニ實際ノ事實ニ於テ、過失ノ
認定ハ、既ニ其事情ガ去ツテ後、特ニ提出セラレテ居ル證據ノ
上テ之ヲ判斷スルモノデアルカラ、其特殊ノ事情ノ下ニ於テモ、
冷靜ノ態度ヲ持シ得ルカノ如キ想定ノ下ニ、推論セラル、コト
ガ少クナイ。(註三)

(註三) F. Pollock's, The Law of Torts, p. 482

五、尙注意ノ程度ニ關シテ特ニ研究ヲ要スルコトハ、幼兒其
他精神ノ不完全ナル者ノ助勢過失デアル。此種ノ者ニ就イテ
ハ、通常人ト同一程度ノ注意ヲ要求スルコトハ到底不可能デア
ル。英國私犯法ニ於テ精神不完全者(lunacy)ガ、不法行爲上ノ
責任ヲ負フベキカ否カニ付キ、寧ロ積極的ノ見界ガ優勢デア
ル。(註四)然ルニ其助勢過失ガ、加害者ノ免責ノ抗辯トナルヤ
否ヤニ付テハ、寧ロ多ク消極的ノ說ヲ見ルコトハ一ノ奇トセザ
ルヲ得ナイ。

併シ此種ノ者ニ付イテモ責任能力ノ根據ヲ其者ノ辯識能力ニ
求メ、而シテ其者相應ノ注意義務ヲ要求スルコトガ、理論上正
當デアラネバナラヌ。從テ幼兒ト雖モ辯識能力ヲ有スル以上
ハ、法律上注意義務ヲ課セラルルモノト言ハネバナラヌ。併シ

通常人ト同一程度ノ注意ヲ要求スルコトハ出來ヌカラ、其注意ノ程度ハ、其者ニ期待シ得ベキ通常ノ注意ヲ以テ、満足セネバナラヌ。從テ幼兒ノ過失ハ常ニ助勢過失トシテ免責ノ抗辯トナスベカラズト斷シ去ルコトハ決シテ精確デナイ。(註五)

(註四) Underhill's, Law of Torts p.

(註五) Salmond's, Law of Torts p. 37

第二節 助勢過失ノ私犯ニ於ケル法律構成的地位

助勢過失ヲ以テ加害者ノ免責事由トナスニハ、之ヲ以テ私犯(不法行爲)ノ成立阻却原因、即チ消極的構成要件トシテ、理解スルコトモ出來ルシ、又私犯ノ構成要件ニ非ズシテ、單ニ不法行爲者ノ免責ノ抗辯權トシテ構成スルコトモ出來ヤウ。併シ英米法ニ於テハ後者ノ見界ニ從テ、助勢過失ハ單ニ加害者ノ側ニ於ケル、免責ノ抗辯トシテ、取扱ハレテ居ル。從テ加害者ガ之ヲ採用セザル限り、加害者ノ責任ニ消長ヲ來スコトナク又助勢過失ノ立證責任モ、之ヲ主張スル加害者(被告)ニ存スルモノト言ハネバナラヌ。

第三章 助勢過失ノ法理的基礎

英米法ニ於テモ後章ニ詳説スルガ如ク、不法行爲者ハ、其ノ行爲ト因果關係ノ存スル結果ニ付キ、假令第三者ノ行爲ガ介入シタル場合ニ於テモ、被害者ニ對シテ、賠償ノ責ニ任ゼネバナラス。然ルニ其介入シタル他人ノ行爲ガ、被害者自身ノ過失行爲ナル場合ニ於テハ、之ヲ助勢過失トシテ全然加害者ノ責任免除ノ事由トナスモノデアル。即チ其結果カラ見ルナラバ、被害者ノ助勢過失行爲ノ介入ハ全然加害者ノ行爲ノ因果關係ヲ中斷スルコトトナルノデアル。然ラバ、法律ハ何故ニ被害者ノ助勢過失ニ、カカル特別ノ效果ヲ附スルデアラウカ。此點ニ就テハ二種ノ見界ガ行ナハレテ居ル。講學ノ便宜上其一ヲ因果關係說ト言ヒ、其ノ二ヲ損害防止目的說ト名付ケヤウ。

一、因果關係說

此說ハ助勢過失ヲ以テ、因果關係論ノ一態様トシテ取扱ハントスルノデアル。即チ他人ニ對シ、自己ノ蒙リタル損害ノ賠償ヲ求ムルニハ、其損害ガ、他人ノ過失ノ結果タル場合ニ限ラレネバナラス。然ルニ助勢過失ノ場合ニアリテハ、被害者自身ノ過失ガ、法律上其損害ノ原因ヲ爲シテ居ルカラ、他人ヲシテ之ガ賠償ノ責ニ任ゼシムベキ理由ハナイト言フノデア

ル。(註一)

(註一) F. pollock's, The Law, of Torts p. 463

Begelew's On Torts. p. 368

併シ助勢過失ノ範圍ハ既ニ説述シタルガ如ク、必ズシモ因果關係ノ一般原則ニ依テノミ、決定セラルベキデハナイ。即チ一般原則ニ從ヘバ、加害者ノ過失ト損害トノ間ニ因果關係ノ存スル場合ニ於テ、尙加害者ヲシテ責任ヲ免レシムルコトガ少クハイ。從テ助勢過失ヲ以テ、假令因果關係ノ問題トシテ取扱フベキモノトシテモ何故ニ助勢過失ノ場合ニ於テハ、因果關係ノ一般原則ニ依ラズシテ、更ニ特別ノ標準ヲ求メネバナラヌカヲ、理解スルコルハ不能デアアル。

二、損害防止目的説

此説ハ助勢過失ヲ以テ加害者ノ免責事由ト爲スノハ、決シテ法律上ノ他ノ原理カラ續釋セラルベキモノデハナク、單ニ實際的政策上ノ理由ニ外ナラヌト爲スノデアアル。即チ被害者ノ賠償請求權ヲ剝奪スル結果、各自ハ自然他人ノ過失ニ基ク危險ニ對シ一層深キ注意ヲ拂ヒ、結局損害ノ發生ヲ未然ニ防ギ得ルコトトナルデアラウト言ノデアアル。(註二)蓋シ此理由ヲ措イテ到底他ニ助勢過失ノ理由的根據ヲ求ムルコトハ出來スデアラウ。

(註二) F. Pollock's, The Law of Torts p. 466

W.s.-ohofield in Harv. LawRev. III 27

第四章 助勢過失ト因果關係

第一節 英米法ニ於ケル

因果關係論ノ大要

第一款 總 說

一、助勢過失ハ被害者ノ過失ガ加害者ノ過失ト、相競合シテ損害ノ原因ヲ爲ス場合ニ生スベキ問題デアルカラ、助勢過失ト因果關係論トノ關係ハ本稿ニ於テ、之ヲ看過スルコトハ出來ヌ。而シテ此點ヲ明ラカニスルガ爲メニハ、先ツ因果關係論ノ大要ヲ理解スルコトガ、當然ノ順序デアラネバナラヌ。

英米私法ニ於ケル因果關係論ハ(1)不法行爲ノ賠償義務ノ範圍ノ決定標準 (2)金錢債務不履行ノ場合ニ於ケル債務者ノ損害賠償義務ノ範圍ノ決定標準 (interest rule) (3)金錢債務以外ノ債務不履行ノ場合ニ於ケル損害賠償義務ノ範圍ノ決定標準 (contemplated consequences rule) 及(4)保險者ノ填補責任ノ決定標準 (principle of causa proxima) トニ於テ、各々別個ノ原則ガ行ハレテ居ル。併シ助勢過失ハ私犯法上ノ問題デアルカラ、茲ニハ(1)ノ場合ニ付キテノミ、大要ヲ記述シセウ。

第二款 自然的蓋然的結果說

一、不法行爲者ハ其行爲ノ結果ニ付、如何ナル範圍ニ於テ損

害賠償ノ責ニ任ゼネバナラヌカニ關シ、英米法ニ於テモ、從來種々ノ説ガ、試ミラレテ居ル。(註一)併シ判例ノ上ニ於テハ古クカラ自然的蓋然の結果説(natural and probable Consequences rule)ガ、Authority トサレテ居ル。

此説ハ不法行爲ハ、其行爲ノ自然的蓋然の結果ニ就キテノミ、責ヲ負フベキモノトナシ、而シテ如何ナル結果ヲ以テ、自然的蓋然の結果ト爲スベキカニ付キテハ、下ノ如キ標準ヲ以テ之ヲ決定セントスルノデアル。

自然的蓋然の結果トハ善良ナル管理者(reasonable person)ガ、行爲者ト同一ノ地位ニ立タバ、其行爲ヨリ生ズベキコトヲ豫見シ得ベカリシモノト認ムベキ結果ヲ言フノデアル。(註二)

(註一) 英米法ニ於ケル因果關係論ニ就キテハ法學論叢——卷四、五號號ニ宮本學士ノ研發表アリ。

(註二) A consequence is natural and probable when it is so likely to result from the act that a reasonable man in the circumstances of the wrongdoer and with his knowledge and means of knowledge, would have foreseen it and abstain from the act accordingly.

即チ自然的蓋然の結果説ハ、其結果ガ豫見シ得ベカリシヤ否ヤヲ以テ標準ト爲シ、若シ豫見得ベカラザルモノハ、假令其結果ト行爲トノ間ニ、物理的ニ原因結果ノ關係アル場合ニ於テモ、法律上ノ因果關係アルモノトシナイノデアル。併シ苟モ、豫見シ得ベカリシ結果ニ付テハ、行爲者ガ事實上、之ヲ豫見シタカ否カハ、法律上ノ因果關係ノ存在又ハ行爲者ノ責任ニ消長

ヲ來スモノデハナイ、何故ナラバ因果關係ノ問題ハ、外界ノ現象タル行爲ト、其結果トノ間ノ純客觀的ノ關係ノ問題デアツテ、外界ノ現象タル結果ト行爲者ノ内部ノ認識トノ關係、即チ物心兩界ノ問題デハナイカラデアル。後者ハ故意過失ノ對象タルベキモノデアツテ、因果關係トハ劃然之ヲ區別セネバナラス。

併シ不法行爲者ノ賠償責任ノ範圍ハ、上述ノ客觀的標準ノミニヨツテ決定セララルモノデハナイ。此原則ノ外ニ更ニ intended Consequences rule トモ稱スベキ、主觀的ノ標準ノ存存ルコトヲ、忘レテハナラス。即チ豫見シタル結果 (intended consequences) (註三)ニ付キテハ、假令ソレカ行爲トノ間ニ、前述ノ如キ自然的蓋然的ノ結果タル關係ノナイ場合デモ、其賠償ノ責ニ任ゼネバナラス。從テ不法行爲者ノ賠償責任ノ範圍ハ、豫見シタル結果、及其行爲ノ自然的蓋然的結果ニ依リテ定メラルベキモノト言ハネバナテヌ。

(註三) 故意ノ内容ニ付キテハ、結果ノ發生ノ豫見即チ認識ノミモ必要トスル所謂認識主義ト、認識シタル結果ノ發生ヲ容認又ハ希望スルコトヲ必要トスル所謂意思主義ノ争ガアルケレ共、英法學者ハ主トシテ後者ノ見界ニ從ヒ故意即チ intention ヲ分析シテ expectation (豫見)ト desire (希望)トノニ要素ニ分ツコトカ普通デアル。

併シ英米ニ於テハ、行爲者ハ、自己ノ行爲ノ自然的結果ハ、之ヲ希望シタルモノト、推定スベキ旨ノ擬制的ノ原則ガ行ハレテ居ルカラ、意思主義ノ缺點ハ之ニヨツテ補ハレ得レテアラウ。

三、前述ノ自然的蓋然の結果説ハ、數多ノ判例ノ遵據スル所
デ、英米法上殆ト確定不動ノ原則ト信ゼラレテ居タトモ言ヘ
ヤウ。然ルニ該原則ハ、最近一九二一年ノ (In re polemis and
Furness, withly & Co, 事件(The Thrasyvoulos 號事件)ニ於テ、
排斥セラルルニ至ツタ。從テ因果關係ノ決定標準トシテ自然的
蓋然の結果説ハ、最早英法上其存在ヲ失フタモノト言フテモ差
支ヘナカラウ。

而シテ同事件ハ此點ニ關シ、新ナル原則ヲ設定スベキ標準判
例 (leading case) ト稱スベキモノデアルカラ、其事案ノ内容ヲ
記述シヤウ。

The Thrasyvoulos 號ハ、罐入ノ揮發油 (petrol in tin) ヲ、其
船艙中ニ積載シテ居タ。所ガ航海中其罐ノ裂目カラ、揮發油ガ
漏出シ、爲メニ船艙中ニ油氣 (petrol vapour) ガ充滿スルニ至
ツタ。然ルニ同船ガ寄港地ニ於テ他ノ貨物荷役ノ際、荷役人夫
ガ誤ツテ貨物ヲ取り落シ、其落下シタ貨物が荷役人夫達ノ足
場ニ使用シテ居タ、重イ板ニ當リ、爲メニ又其板ガ船艙中ニ墜
落シ來テ、揮發油ノ罐ニ激ク衝突スルニ至ツタ。然シテ其衝突
ノ際ニ生ジタル熱ノ爲メニ、船艙中ニ充滿セル油氣ガ爆發シテ
火災ヲ起シ、遂ニ船體モ全損ニ歸シ、二〇〇。〇〇〇磅ノ損害
ヲ生ズルニ至ツタト言フ事案デアル。貨物ノ墜落ニ依テ火災
ヲ惹起シ、遂ニ船舶ヲ燒失スルニ至ルデアラウト言フコトハ、
到底實物通常ノ状態ニ於テ、豫想シ得ベキコトデナイ。換言ス

レバ船舶ノ燒失ハ、貨物ノ墜落ト言フ過失ノ自然的蓋然的結果ト言フコトハ出來ナイ。從テ自然的蓋然的結果ニ從ヘバ、荷役人夫ノ使用者ニ、船體ノ燒失ニ基ク損害ニ付、賠償ノ責任ハナイト言ハネハナラス。

然ルニ本件ニ於テハ、從來ノ自然的蓋然的結果說ヲ排除シ、被告ニ損害賠償ノ責任アリト判示セラレタ。而シテ其判決理由ヲ見ルニ結果ノ豫見シ得ヘカリシヤ否ヤハ、單ニ過失アリヤ否ヤヲ、決定スル標準タルニ止マリ、因果關係ノ標準ト爲スベキモノデハ、ナイトシテ居ル。而テ豫見シ得可キ結果ヲ豫見シナイコトハ、勿論過失デアルケレ共、豫見ノ欠缺即チ過失アル場合、如何ナル範圍ノ結果ニ付キテ、責任ヲ負ハネバナラスカハ、全然別個ノ原則ニ依ツテ決定サレネバナラス。(註四)

(註四) Salmond's, Law of Torts p. 140

然ラバ自然的蓋然的結果說ヲ捨テテ、如何ナル標準ニ依リテ、因果關係ノ範圍ヲ決定スベキデアラウカ。前記事件ノ判決理由ニ於テハ新ナル原則ヲ示スコトナクシテ、貨物墜落テウ過失行爲ハ、船舶燒失ノ直接ノ原因ト認ムベキモノデアルカラ、被告ハ責任ヲ免ルルコトハ出來スト判示シタルニ過ギヌ。而シテ茲ニ所謂直接原因 (direct cause) ナル語ハ、確定的ノ意味ヲ以テ用ヒラレタルモノデハナイ。寧ロ單ニ法律上之ヲ以テ原因ト認ムベキモノデアルト言フ意義ニ使用セラレタルニ過ギヌ。direct cause ナル字義カラシテ、直ニ因果ノ連鎖中ニ、他ノ原因ノ介

人スルコトヲ許サザル意味ノ proximate cause ノ義ニ解シテ、ナラス。

從テ更ニ新ナル判例ガ出テ、之ヲ説示セザル以上ハ此點ニ關シ、英國普通法ニ於テ既定ノ原則ヲ缺イテ居ルト言ハネバナラス。又前記判例ニ依テ、自然的蓋然的結果説ガ、確定的ニ排斥セラルルニ到ツタカ否カモ、既ニ未決ノ問題デアル。(註五)從テ新ナル原則ノ提示ハ、單ニ學説トシテ試ミ得ルニ過ギナイ。之ヲ以テ直チニ英米法ノ原則トナスコトハ出來ヌ。

(註五) Salmond's Law of Torts p. 142

第三款 危險狀態説

一、Salmond ガ The Thrasyvoulos 號事件其他ノ判例ヨリ、歸納的ニ把捉スルコトヲ得タリト稱スル新説ヲ、紹介スルコトモ亦強チ無益デアアルマイ。而シテ Salmond ガ自然的蓋然的結果ニ代ルベキモノトシテ、指摘スル原則ハ、便宜上之ヲ危險狀態説 (dangerous condition rule) トデモ命名スルコトガ出來ヤウ。

其説ク所ニ從ヘバ「不法行爲者ノ其豫見セザリシ結果ニ對スル賠償責任ハ、其行爲ニ因リ生ズルニ至リタル被害者ノ權利ヲ侵害スベキ危險狀態ニ基因シタル損害ニ限ラルベキモノニシテ、而テ苟モ此危險狀態ノ發展ノ結果タル損害ニ於テハ、之ガ自然的蓋然的結果トシテ、豫見シ得ベキモノタリシヤ否ヤハ問

フベキニ非ズ」ト言フコトヲ基本的原則(積極的の原則)トシ、更ニ其消極的ノ限界ヲ明ニスル爲メニ、「但シ行爲者ノ惹起シタル危險狀態ガ、止ミタル後ニ生ジタル損害及假令其危險狀態存スルモ其危險狀態ト全然關係ナキ獨立的原因ニ基因シタルモノト認ムベキ損害ニ付キテハ此限ニ非ズ」トイフ補足的ノ原則ヲ用ヒントスルノデアアル。(註六)

(註六) The liability of a defendant for the unintended consequences of his unlawful act is limited to the consequences which flow from the act by way of some dangerous condition thereby created in violation of the plaintiff's rights, such a condition exist at the peril of the wrongdoer and he must pay for all the results thereof, however unexpected and abnormal in nature, magnitude, or mode of causations; but the defendant's liability does not extend to consequences which, though they flow from the act itself, are independent of any such risk so wrongfully imposed on the plaintiff, either because that risk has already ceased to exist, or because, though still existing it has not contributed to the consequence in question (Law of Torts p. 155)

而シテ此危險狀態說ヲ明確ニ理解スルガ爲メニハ、危險狀態ノ意義及範圍ヲ定メ、更ニ進ンデ如何ナル獨立的原因ノ介入ニヨツテ、危險狀態ノ原因ガ中斷セラルルニ至ルベキカヲ、明ニセネバナラス。

二、茲ニ所謂危險狀態(dangerous condition)トハ、不法行爲ノ結果惹起セラル、ニ至リタル、權利侵害ノ可能狀態ニ外ナラ

ス。The Thrasyvoulos 號ニ就テ言ヘバ、貨物墜落ノ結果生ジタ爆發及火災ノ可能狀態ガ、即チ危險狀態ニ外ナラス。

而シテ此危險狀態ニ基ク損害ハ、其危險狀態發展ノ經過、又ハ態様ガ、如何ニ異常 (abnormal) デ、到底豫見スルコトヲ得ザルモノデアツテモ、危險狀態發展ノ結果タル以上ハ、不法行爲トノ間ニ因果關係ヲ認メネバナラス。即チ上掲ノ例ニ於テ船舶ノ燒失ハ、貨物ノ墜落テウ事實ヨリ、當然伴ヒ來ル結果ト言フコトハ出來ヌケレ共、實際ニ於テ其貨物ノ墜落ノ爲メニ惹起セラレタル危險狀態發展ノ結果ニ外ナラス。又甲ガ乙ニ輕微ナル傷ヲ負セ、而シテ偶々乙ノ健康狀態ノ不良ナリシタメ、遂ニ乙ハ其負傷原因トナツテ死亡スルニ至ツタト、假定シテ見ヤウ。此場合若シ甲ガ乙ノ健康狀態ノ不良ナルコトヲ知ラナカツタシタナラバ、死亡ナル結果ハ、到底豫見シ得ザリシモノト言ハネバナラス。併シ豫見スルコトガ、出來ナイコトヲ理由トシテ、負傷ト死亡トノ間ノ因果關係ヲ否定スルコトハ出來ヌ。死亡モ事實上矢張、負傷ト言フ危險狀態ノ發展ノ結果ニ外ナラス。

併シ危險狀態ノ發展ニハ、自ラ一定ノ制限ガナケレバナラス。而シテ其制限トハ、不法行爲ニヨリ惹起セラレタル其危險狀態ガ、最早損害發生可能性ヲ失ヒ、再ビ正常 (normal state of things) ニ復スルコトヲ言フノデアル。不法行爲ニヨリ惹起セラレタ危險ハ、必ズシモ無限ニ發展スルモノデハナイ。必ズ

ヤ、其危險性ヲ失ツテ正常ニ復歸スル時期ガ到來スルモノデア
ル。而シテ一旦正常ニ復シタル後ニ發生シタル結果ハ、假令論
理的ニ不法行爲ノ結果ト、認ムベキ場合ニ於テモ、危險狀態ノ
發展ノ結果ト言フベキモノデハナイカラ、法律上ノ因果關係ヲ
認ムルコトハ出來ス。例之甲船ノ過失ニ因テ乙船ト衝突シ、乙
船ガ遂ニ其衝突ニヨリ損傷ヲ蒙ルニ至ツタト假定シヤウ。此場
合乙船ノ損傷ハ勿論甲船ノ過失ニ因テ、惹起セラレタ危險狀態
ニ外ナラス。而シテ又損傷ノ結果乙船ガ、沈沒スルニ至ツタナ
ラバ、沈沒モ亦其危險狀態ノ發展ニ外ナラス。併シ乙船ガ一旦
避難シテ修繕ヲ爲シタナラバ、危險狀態ハ最早正常ニ復シタモ
ノト言ハネバナラス。從テ若シ修繕後再航ヲ試ミ、其途中暴
風ニ遭遇シテ沈沒シタトシテモ、其沈沒ハ甲船ノ過失ニ依リテ
惹起セラレタル、危險狀態發展ノ一部ト言フコトハ出來ス。但
シ甲船トノ衝突ガ、ナカツタナラバ、乙船ハ其時期ニ其場所ヲ
航行シナカツノデアアルカラ、暴風ニ遭遇スルコトモナカリシ筈
デアアル。從テ暴風ノ爲メノ沈沒モ論理的ニ言ヘバ、矢張甲船ノ
過失トノ間ニ因果關係ノ存スルコトハ、否定出來ス。併シ暴風
トイフ危險ハ、甲船ノ過失ノ有無ニ拘ラズ、全然別個ノ原因ニ
依テ、生ズルモノデアアルカラ、甲船ノ惹起シタ危險狀態ノ發展
ト言フコトハ出來ナイ。不法行爲ニヨリ惹起セラレタ危險狀態
ノ發展ト、之ト全然關係ナキ他ノ危險ノ介入トハ劃然區別セネ
バナラス。

今甲ノ過失ヨリ乙ガ負傷シ治療ノ爲メ病院ニ行ク途中、自動車ノ爲メニ轢殺サレタトシテ見ヤウ。甲ノ過失ノ爲メニ負傷シナカツタトシタナラバ、其時刻ニ乙ハ、其場所ヲ通行スル筈ハナカツタト言ヒ得ル。從テ論理的ニ言ヘバ、乙ノ死亡ハ矢張甲ノ過失ノ結果デアルト言フコトガ出來ヤウ。併シ乙ノ死亡ヲ以テ、甲ノ惹起シタル危険状態ノ發展ノ一部ト言フコトハ出來ナイ。何故ナラバ、轢殺ノ危険ハ、甲ノ過失ト全然無關係ニ、發生進行シツツアル、他ノ危険状態ニ外ナラヌカラデアル。即チ其危険ハ乙ガ病院ニ行ク途中タルト、其他ノ場合タルトニ、何等差等ノアルモノデハナイカラデアル。

三、上述スル所ニ依テ危険状態ノ意義及其發展ノ限界ヲ、明ニスルコトガ出來タカラ、更ニ進ンデ危険状態説ノ適用ハ、他人ノ行爲ノ介入ニ依テ、如何ナル影響ヲ受ケネバナラヌカヲ述ベネバナラヌ。而シテ此點ハ更ニ第三者ノ行爲ノ介入ト、被害者自身ノ行爲ノ介入トニ、區別シテ論述スルコトガ便宜デアル。

(一) 第三者ノ行爲ノ介入

第三者ノ行爲ノ介入ハ又更ニ(2) 過失行爲ノ介入、(2)故意行爲ノ介入及 (3)適法行爲ノ介入ノ三種ニ分ケルコトガ出來ル。唯茲ニ一言スベキコトハ、第三者ノ行爲ノ介入ニ依テ、因果關係ガ中斷セラルルカ否カノ問題ハ、豫見セザル結果 (unintended consequence) ニ關スルモノデアツテ、不法行爲ノ豫見シタル結

果ニハ關係ナイコトデアル。豫見シタル結果ニ付キテハ、intended consequences rule ノ適用ニ依テ、假令第三者ノ介入シタル場合ニ於テモ、不法行爲者ハ責任ヲ負ハネバナラス。此範圍内ニ於テハ全然危險狀態論ノ適用ナキハ勿論、又因果關係中斷ノ問題ヲ生ジナイ。(註七)

(註七) Salmond's, Law of Torts p. 160

(1) 過失行爲ノ過失介入 (intervening of negligence of a third person)

不法行爲ニヨリ惹起セラレタル危險狀態ノ發展ノ過程ニ、第三者ノ過失行爲ガ介入シタ場合ニ於テハ、因果關係ハ之ニ依テ中斷セラレタルモノトシテ、取扱フベキデアラウカ。自然的蓋然の結果說ニ從ヘバ、其第三者ノ過失ノ介入ガ、相當ノ注意ヲ以テ豫見シ得ベキモノタル場合ニ於テハ、因果關係ハ中斷セラルベキデアナイトセラレテ居ル。而テ此結論ハ因果關係ノ標準ヲ、豫見シ得ベキモノナリヤ否ヤニ求ムル、當然ノ歸結ト言ハネバナラス。併シ危險狀態說ニ依レバ、結果ガ豫見シ得ベカリシヤ否ヤハ、單ニ過失ノ有無ヲ、決定スベキ標準タルニ止マリ、因果關係論トハ全然關係ノナイモノト、爲サレルノデアルカラ、第三者ノ行爲ノ介入ガ因果關係ヲ中斷スルヤ否ヤヲ決スルニ當リテモ、其行爲ノ介入ガ豫見シ得ベカリシヤ否ヤニ依テ、決定スルコトハ出來ヌ。而シテ此點ニ付キテハ、未ダ既判ノ原則ヲ認ムルコトハ出來ヌカラ、結局理論ヲ以テ決スルノ外

ナイ。

今危険状態説ヲ論理的ニ展開スルナラバ、第三者ノ行爲ノ介入ガ、因果關係ヲ中斷スルヤ否ヤノ問題モ、矢張介入シタル行爲ガ、不法行爲ノ惹起シタル危険状態ノ發展ニ過ギザルヤ否ヤニ依テ、決定セラルベキモノト言ハネバナラヌ。而シテ茲ニ所謂危険状態ハ、必ズシモ物理的原因 (physical cantion) ノミニ依ルベキニ非ズシテ、他人ノ任意行爲ノ介入シタ場合ヲモ含包セシムベキモノデアル。若シ其介入シタル他人ノ行爲ガ、不法行爲者ノ惹起シタル危険状態ヲ前提トシテ、始メテ損害ノ原因トナツタ場合ニ於テハ、其介入シタ行爲モ、危険状態ノ發展ノ一部トシテ、取扱フベキデアル。詳言スレバ既ニ惹起セラレタ状態ガ、第三者ノ過失行爲ノ介入ノ機會 (oppotunity) 又ハ誘因 (temptation) トナツタ場合ニ於テハ、第三者ノ行爲ノ介入ニ依テ因果關係ハ中斷セラルベキモノデハナクシテ、却ツテ其介入シタ行爲モ、既ニ惹起セラレタ危険状態ノ發展ノ一過程ト見ルベキデアル。例之甲ノ過失ニ依テ乙ガ負傷ヲシ、其治療中、丙醫師ノ過失ニ依テ、死亡スルニ至ツタトシテ見ヤウ。若シ危険状態ノ觀念ヲ物理的原因ノミニ限ルトキハ、甲ノ過失ニ依テ惹起セラレタル危険状態ハ、乙ノ第一ノ負傷ノ自然的發展ノミニ限ラルベキモノデアツテ、丙醫師ノ治療行爲ハ甲ノ惹起シタ危険状態ノ發展ト言フコトハ出來ヌ。併シ危険状態ヲ、上述ノ如ク廣義ニ解スルトキハ、丙ノ治療行爲モ甲ノ惹起シタル危険ノ

一部トシテ取扱フコトガ出來ル。何故ナラバ丙ノ過失行爲ノ介入ハ、甲ノ惹起シタル危險狀態ヲ前提トシテ始メテ豫想シ得ベキモノデアルカラデアアル。從テ甲ハ乙ノ死亡ニ對シテモ責任ヲ負ハネバナラス。

(2)故意行爲ノ介入(interviening of wilful wrongdor)

過失行爲ノ介入ガ原則トシテ、因果關係ヲ中斷セザルコトハ、前述ノ如クデアアル。併シ故意行爲介入ニ付キテハ、到底同一ニ論ズルコトハ出來ヌ。何故ナラバ、不法行爲者ノ側ヨリ見レバ、第三者ノ過失行爲ト故意行爲トハ、其介入ノ可能性ニ於テ到底同一ニ論ズルコトハ出來ヌカラデアアル。過失行爲ノ介入ハ、其性質上或程度迄不法行爲者ニ於テ、豫測シ得ルノデアアル。從テ各人ハ自己ノ行爲ノ結果他人ヲシテ、過失行爲ヲ介入セシムベキ機會又ハ誘因ヲ與ヘテハナラス、義務ヲ負フモノダトモ言ヒ得ル。併シ故意行爲ハ全然之ト趣ヲ異ニシ、其性質範圍ニ於テ、到底其介入ヲ豫測シ得ルモノデハナイ。從テ不法行爲者ヲシテ、假令其者ガ他人ノ故意行爲ノ介入ノ機會ヲ作ツタトシテモ、其介入ニ依リテ生ジタル損害ニ付キ、責任ヲ負ハシムルコトハ、過酷ニ失スルモノト言ハナクテハナラス。故ニ故意行爲ノ介入ハ原則トシテ、因果關係ヲ中斷スルモノト言ハネバナラス。即チ故意行爲ノ介入ハ不法行爲者ノ惹起シタル危險狀態ノ發展トシテ、取扱フベキモノデハナイノデアアル。但シ此原則ニ對シテ二三ノ例外ヲ認メネバナラス。

第一ニ例外トシテ取扱ハネバナラヌコトハ、第三者ノ介入行爲ガ、不法行爲者自身ノ授權 (authorisation) 又ハ教唆 (instigation) ニ基ク場合デアル。此種ノ場合ニ於テハ、其介入行爲ガ、第三者ノ故意行爲ナルノ故ヲ以テ、不法行爲者ノ責任ヲ免除シ又ハ輕減スベキモノデハナイ。即チ不法行爲ハ其介入行爲ノ結果ニ對シテモ、介入者ト共ニ責任ヲ負ハネバナラヌ。併シ此原則ハ、嚴密ニ言ヘバ前記ノ因果關係中斷說ニ對スル、例外トイフコトハ出來ヌ。何故ナラバ授權又ハ教唆ニヨリテ、他人ヲシテ不法行爲ヲ爲サシメタル者ガ、被授權者 (agent) 又ハ被教唆者ノ行爲ニ付キ、責任ヲ負ハネバナラヌノハ、決シテ其等ノ行爲トノ間ニ直接因果關係ノ存スル故デハナク、寧ロ全然別個ノ法理ニ基クモノデアルカラデアル。

更ニ例外トシテ掲ゲネバナラヌコトハ、intended consequence rule ノ適用ノ結果デアル。已ニ一言シタル如ク、危險状態ハ其適用ヲ豫見セザル結果 (unintended consequences) ニ限ラルベキモノデアツテ、豫見シタ結果 (intended consequences) ニ付テハ、之ガ危險状態ノ發展ノ一部タルト否トヲ問ハズ、當然責任ヲ負ネバナラヌ。從テ第三者ノ故意行爲ノ介入スベキコトヲ豫見シタル場合ニ於テハ、不法行爲者ハ當然其介入行爲ノ結果ニ對シテモ、責任ヲ負ハネバナラヌ。

尙不法行爲者ガ、第三者ノ侵害行爲ヲ防グベキ義務ヲ負擔シタル場合モ亦一ノ例外トシナケレバナラヌ。例之有體動産ノ受

寄者 (bailee) ハ、普通法上所有者ニ對シ、保管ノ義務ヲ負フモノデアル。然ルニ受寄者ノ不注意ニ依リテ、第三者ニ竊取セラレタル場合ニ於テハ、受寄者ハ其物品喪失ノ直接原因ガ第三者ノ故意行爲ナルノ故ヲ以テ、責任ヲ免レルコトハ出來ヌ。

最後ニ問題トナルノハ、第三者ノ行爲ノ介入ガ、不法行爲者ニ於テ、自己ノ行爲ノ自然的蓋然的結果トシテ、當然豫見シ得ベカリシ場合デアル。此點ニ關シ Lord Sumner ハ一九二〇年ノ *Weld-Blundell v. Stephens* 事件ニ於テ、第三者ノ故意行爲ノ介入スベキコトガ豫見シ得ベカリシモノナリシトノ理由ヲ以テ其介人行爲ノ結果ニ對シ、不法行爲者ヲシテ責任ヲ負ハシムベキ根據ハ、理論上ニ於テモ (on principle) 又判例ノ上ニ於テモ、見出スコトハ出來ヌト論ジテ居ル。併シ Salmond ハ、其結論ニ對シ疑ヲ挿ンデ居ル。今甲ガ乙ノ物品ヲ不法ニ盜難ノ恐レアル場所ニ置イタト假定シヤウ。甲ノ側カラ見レバ、其物品ガ竊取セラルベキコトハ、當然豫見シ得ベキモノト言ハネバナラス。即チ盜難ニヨル喪失ハ、甲ノ行爲ノ自然的蓋然的結果ニ外ナラス。然ルニ若シ、實際ニ竊取セラレタル場合ニ、Lord Sumner ノ見界ニ從ヘバ、甲ハ責任ヲ負フベキモノデナイト言ハネバナラス。而シテ Salmond ハ此ヲ結論ヲ非ナリトシテ居ルニ拘ラズ、第三者ノ行爲ノ介入ガ、自然的蓋然的ナル場合ニ於テハ、因果關係ハ常ニ中斷セラルベキモノデナイト言フ一般の原則ヲ認ムルコトニモ躊躇シテ居ル。

(註八) Salmond's, Law of Torts p. 169

(3) 適法行爲ノ介入 (intervening of lawful act)

介入行爲ガ適法ナル場合ハ、更ニ之ヲ故意又ハ過失ニ基ツカザル所謂無過失行爲ト違法阻却ノ原因ノ存スルニヨリ不法トナラザル行爲トニ分チテ觀察スルコトガ便宜デアアル。

(a) 無過失行爲ノ介入 (intervening of exutable act)

此點ニ付キテハ過失行爲ノ場合ト同一ニ取扱ハネバナラヌ。何故ナラバ他人ノ過失行爲ノ介入スベキコトヲ豫想スベキモノデアアルナラバ、無過失行爲即チ不可抗力ノ介入ハ、尙更ノコトデナケレバナラヌカラデアアル。從テ他人ノ無過失行爲ガ、不法行爲者ノ行爲ヲ前提原因トシテ、始メテ損害ノ原因トナツタ場合ニ於テハ、其介入シタル第三者ノ無過失行爲モ、不法行爲者ノ惹起シタ危險状態ノ一部トシテ取扱ハネバナラヌ。(註九)

(註九) Salmond's, Law of Torts, p. 170

(b) 適法原因ニ基ク行爲ノ介入 (intervening of Justifiable act)

適法原因ニ基ク第三者ノ行爲トハ、結局第三者ガ之ヲ爲シ得ベキ權利ヲ存スル行爲ニ外ナラヌ。然ラバ、此種行爲ノ介入ハ、當然因果關係ヲ、中斷スルモノト言ハネバナラヌデアアラウガ。何人ト雖モ他人ニ權利行使ノ機會ヲ與ヘザル様、注意スル義務ヲ負フモノデハナイ。從テ他人ノ權利行使ノ結果ニ對シ其行使ノ機會ヲ與ヘタモノト雖モ、自ラ責任ヲ負フベキ理由ハナイノ

デハナカラウカ。此點カラ見ルトキハ第三者ノ權利行爲ノ介入ハ、當然因果關係ヲ中斷スルモノト言ハネバナラス。併シ第三者ノ權利行使ノ原因ガ、不法行爲者ノ行爲自體ナル場合ニ於テモ、常ニ同一ニ論斷スベキカハ、頗ル疑問デアアル。例之甲ガ乙ノ使用人丙ノ名譽ヲ毀損シ、乙ハ之ガ爲ニ、丙ヲ解雇スルニ至ツタト假定シヤウ。此場合丙ヲ、解雇スルコトハ、全然乙ノ權利ニ屬スルコトデアアル。併シ、甲ガ丙ノ名譽ヲ毀損シナカッタトシタナラバ、乙ハ丙ヲ解雇スルニ至ラナカッタト認ム可キ場合ニ於テハ、解雇ハ矢張甲ノ名譽毀損行爲ノ結果ト言ハネバナラス。然ルニ單ニ解雇ガ乙ノ權利行使ノ直接ノ結果ナリトノ理由ノミヲ以テ、甲ノ名譽毀損行爲トノ間ノ因果關係ヲ否定スルコトハ、其結果ニ於テ不當ト言ハネバナラス。從テ假令原則トシテ第三者ノ權利行爲ノ介入ハ、因果關係ヲ中斷スルモノトシテモ、矢張此原則ニ對シテハ、多少ノ例外ヲ認メネバナラスデアラウ。併シ此點モ亦普通法上未解決ノ點モアルカラ。茲ニ的確ナ原則ヲ示スコトハ不可能デアアル。(註一〇)

(註一〇) Salmond's, Law of Torts, p. 171

(二)被害者ノ行爲ノ介入 (interveinng of act of the plaintiff)

他人ノ行爲ニ依リ惹起セラレタル危險狀態ノ發展中ニ自分自ラ介入シテ、遂ニ損害ヲ蒙ルニ至ツタ場合ニ於ケル因果關係ノ問題ハ、其被害者ノ介入行爲ガ故意行爲、任意行爲及過失行爲ナル場合ニ分チテ、論ゼネバナラス。茲ニ故意行意 (wil fulact)

トハ、損害ヲ蒙ルベキコトヲ豫見シタ場合ヲ云ヒ、任意行爲 (Voluntary act) トハ損害ヲ豫見スルコトナク、單ニ介入シタル謂ニ外ナラス。

(1)故意行意ノ介入 (intervening of wilful act of the plaintiff)

被害者ガ加害者ノ惹起シタル危険状態ヲ認識シ、且自己ノ介入ノ結果自ラ損害ヲ蒙ルベキコトヲ認識シタル場合ニ於テハ結局加害ヲ承諾シタルコトニ歸着セネバナラス。從テ此場合ハ所謂被害ノ承諾トシテ違法阻却ノ原因 (Volenti non fit iniuria) トナルベキモノデアツテ、因果關係論ニ於テ論ズベキモノデハナイ。

(2)任意行爲ノ介入 (intervening of voluntary act of the plaintiff)

任意行爲トハ前述ノ如ク、被害者ガ加害承諾ノ意思即チ賠償請求權ヲ拋棄スル意思ナクシテ、而モ自ラ進ンデ、加害者ノ惹起シタル、危険状態ノ發展ノ過程ニ介入シタル場合ヲ謂フノデアル。

而シテ判例ノ上ニ於テハ、此種ノ任意行爲ハ、常ニ因果關係ヲ中斷スルモノトセラレテ居ル。即チ一九一七年ノ SS. America 號事件及、一九二二年ノ The San Onofre 號事件等ハ、其一例ニ外ナラス。

SS. America 號事件ハ潛航艇ガ加害船ノ過失ニ依テ、沈没シ、而シテ國家ガ其潛航艇ノ乗組員ノ遺族ニ支拂ヒタル扶助料

(Pensions) フ加害船ノ過失ノ結果ナリトシテ、請求シタル事案デアル。併シ此扶助料ハ、原告ガ法律上ノ義務トシテ、強制セララルモノデハナク、寧ロ所謂涙金 (Compassionate allowances) ニ過ギストノ理由即チ任意ニ蒙ツタ損害ナリトノ理由ヲ以テ其請求ヲ却下セラレタ。

又 The San Onofre 號ハ、同船ガ SS. Melanie 號ノ過失ニ依テ衝突シ、而シテ過失船タル Melania 號ノ損害ガ san Onofre 號ノ損害ヨリモ大キカッタノデ、其救助ノ爲メ同船ノ引曳船中、San Onofre 號ガ擱座シテ、更ニ損害ヲ蒙ルニ至ツタト言フ事案デアツタ。此場合、San Onofre 號ガ、Melania 號ヲ引曳セネバナラヌ様ニナツタノハ、Melania 號ノ過失ニヨリ、兩船ガ衝突スルニ至ツタカラデアル。從テ San Onofre 號ノ擱座ハ、論理的ニ言ヘバ、兩船ノ衝突即チ Melania 號ノ過失ノ結果ニ外ナラヌ。併シ本件ハ Court of appeal ニ於テ、擱座ト兩船ノ衝突トノ間ニ法律上ノ因果關係ヲ認ムルコトハ出來ヌト判決セラレタ。即チ救助ト言フ任意行爲ノ介入ニ依テ、因果關係ハ中斷セラレタルモノトシテ取扱ハレタノデアル。同事件ノ判決理由中、判事 Bankes 卿ハ此事件ハ二人ノ歩行者ガ其中ノ一人ノ過失ニ依テ路上デ衝突シ、而シテ過失者ノミ怪我シタ場合ニ、他ノ一人ガ其怪我人ヲ病院ニ援ケテ行ク途中、自分モ亦躓イテ怪我ヲシタト言フ場合ト、何等異ルコトハナイ。此場合ニ於テモ、後者ハ前者ノ過失ニ依テ兩人ガ衝突シナカッタトシタナラ

バ、自ラモ躓イデ怪我スル筈ハナカツタトノ理由ヲ以テ、過失者ニ對シ、損害賠償ヲ求ムルコトハ出來スト言ツテ居ル。

併シ嚴密ニ言フナラバ、前記事件ハ危險狀態說ノ當然ノ結果デアツテ、因果關係中斷ノ問題デハナイ。即チ San Onofre 號ノ擱座ハ、同船ガ Melania 號トノ衝突ニ依テ、蒙ツタ損害即チ危險狀態ノ當然ノ結果ト言フコトハ出來ヌ。即チ Melania 號ノ過失ニ依テ、惹起セラレタル危險狀態ハ、San Onofre 號ガ衝突ノ際蒙ルニ至ツタ、損害ニ過ギナイ。而シテ同船ガ、擱座スルニ至ツタコトハ、衝突ノ際蒙ツタ損害ニ、何等關係ガナイ、即チ衝突ノ際何等ノ損害ヲ、蒙ラナカツタトシテモ、Melania 號ノ救助ニ從事スレバ、當然避ケ得ザリシモノデアル。

(3)被害者ノ過失行爲ノ介入 (intervening of negligence of the plaintiff)

被害者自身ノ過失行爲ガ加害者ノ、過失行爲ノ原因力ノ進行中ニ介入シタル場合ニ於テ、加害者ハ如何ナル範圍ニ於テ、責任ヲ負フベキカ。換言スレバ、被害者ノ過失行爲ノ介入ハ、加害者ノ行爲ノ因果關係ヲ中斷スルカ否カノ問題ハ、正シク因果關係論ト助勢過失論トノ交錯ノ問題デアル。從テ此點ハ次節ニ於テ之ヲ詳論シヤウ。

第二節 助勢過失論ト因果關係 トノ交錯

既ニ詳説シタルガ如ク助勢過失ハ原因競合ノ問題ニ過ギヌ。從テ原因結果ノ關係ヲ對象トスル、因果關係論ト當然或範圍ニ於テ、相交錯セネバナラス。然ラバ兩者ハ如何ナル範圍ニ於テ相交錯スルカ。又兩者ノ此牴觸ハ、如何ニシテ之ヲ調節ス可キモノデアルカ。而シテ兩者交錯ノ問題ハ、豫見シタル結果ト、豫見セザリシ結果トノ二方面カラ觀察スルコトガ便宜デアラウ。

(1) 豫見シタル結果 (intended consequences)

既ニ前説ニ於テ詳述シタルガ如ク、不法行爲者ハ其豫見シタル結果ニ付キテハ、假令ソレガ不法行爲ノ自然的蓋然の結果タルト否トニ拘ラズ、又ハ危險状態ノ發展ノ結果タルト否トニ拘ラズ、賠償ノ責任ヲ負ハネバナラス。又假令第三者ノ介入ニ依テ生ジタル結果デアツテモ、苟モ豫見シタル以上ハ凡其凡テノ結果ニ對シテ、責任ヲ負ハネバナラス。從テ豫見シタル結果ニ付テハ、全然因果關係中斷ノ問題ヲ生ジナイノデアル。而シテ是ハ intended consequences rule ノ當然ノ歸結ト言ハネバナラス。而シテ此理ハ、被害者ノ助勢過失ガ介入シタル場合ニ於テモ同一デアル。即チ助勢過失ノ介入ガ、加害者ニ於テ豫見シタルモノナルトキハ、加害者ハ助勢過失ヲ理由トシテ其責任ヲ免

レルコトハ出來ヌ。助勢過失ハ豫見シタル結果ニ對シテハ、全然其適用ヲ排除セラルベキデアル。

(2) 豫見セザル結果(unintended consequences)

不法行爲者ハ、其行爲ノ豫見セザリシ結果ニ付キ、如何ナル範圍ニ於テ、賠償ノ責ニ任ゼネバナラスカニ付キ、自然的蓋然的结果説及危険状態説ノ行ハレテ居ルコトハ、前節ニ於テ之ヲ詳論シタ。而シテ、自然的蓋然的结果説ニ從へバ、他人ノ行爲ガ介入シタ場合ニ於テモ、他人ノ介入ガ不法行爲者ニ於テ相當ノ注意ヲ以テ豫見シ得ベカリシ場合ニ於テハ、不法行爲者ハ其介入行爲ノ結果ニ付キテモ、尙賠償ノ責ニ任セネバナラス。而シテ此論理ハ、被害者ノ過失ノ介入シタ場合ニ於テモ、同一デアラネバナラス。又危険状態説ノ場合ニ於テモ、若シモ其介入シタル過失行爲ガ、已ニ惹起セラレタル危険状態ヲ利用シテ、始メテ損害ノ原因トナリ得ル性質ノモノナル場合ニ於テハ、危険状態ノ發展ノ一部トシテ取扱ハレ不法行爲者ハ其介入シタル行爲ノ結果ニ付キテモ、責任ヲ負ハネバナラス。

然ルニ加害者ノ免責事由トシテノ助勢過失ハ、因果關係ノ問題トハ、全然別個ノ理由ニ根據シテ居ル。從テ被害者ノ助勢過失ガ、假令加害者ノ行爲ノ自然的蓋然的结果タリ、又ハ其行爲ニ依リ惹起セラレタル危険状態ノ發展ノ過程ニ過ギナイ場合ニ於テモ、加害者ガ常ニ助勢過失介入後ノ結果ニ付テハ、責任ヲ免除セラルベキモノト言ハネバナラス。此點カラ見レバ、助勢

過失ハ、常ニ因果關係ヲ中斷スルト言フモ、決シテ誤リデハナイ。

併シ被害者ノ過失ガ、助勢過失トシテ加害者ノ責任免除ノ事由トナルハ、極メテ限ラレタル一部ノ場合ニ過ギヌ。從テ被害者ノ過失ガ、介入シタ場合ニ於テモ、助勢過失トシテ取扱フベカラザルモノニ付テハ、矢張因果關係論ヲ以テ決セネバナラス。而シテ此種ノ過失介入後ノ結果ニ付キ、加害者ガ責任ヲ負フベキヤ否ヤハ、第三者ノ過失ト同様其過失ガ豫見シ得ベカリシモノナルヤ否ヤ、或ハ危險状態ノ一部ナリヤ否ヤニ依テ決定セラルベキデアアル。

第五章 被害承諾ト助勢過失

一、被害者ノ承諾ガ不法行爲ニ於ケル違法阻却ノ原因 (justification) タルコトハ、英米私犯法ニ於テモ、我民法ニ於ケルト同様デアアル。而シテ被害者ノ承諾ハ“*Volenti non fit injuria*” 又ハ“*leave and license*” 等ノ語ヲ以テ言ヒ表ハサレルコトガ普通デアアル。併シ其字義ヨリスレバ、*Volenti* 又ハ *leave and license* ナル語ハ、何レモ實際ニ適用セラレテ居ル所ニ比シ、甚ダ狹義ニ失スルモノト言ハネバナラス。何トナレバ *Volenti* 又ハ *leave and license* ナル語ハ、何レモ承諾 (consent) トカ、

容認 (leave) トカ、兎ニ角被害者ニ於テ其加害ヲ許容スルト言フ、何等カ積極的意思状態ヲ必要トスルケレ共、實際ニ於テ、違法阻却ノ原因トシテ取扱ハルル被害者ノ意思状態ハ必ズシモカカル積極的ノ要素ヲ必要トスルモノデハナイ。單ニ危険ヲ認識シテ、之ヲ冒スト言フコトヲ以テ十分トセラルル場合モアルカラデアアル。茲ニ於テ前者ト區別センガ爲メニ、此ノ後ノ場合ヲ assumption of risk (危険ノ冒認)ト名付ケント試ルム學者モアルノデアアル。(註一)

(註一) F. Pollobk's, The Law of Torts, p. 160

二、本來ノ意義、即チ狹義ニ於ケル被害承諾ハ加害ニ對スル被害者ノ同意デアアル。而シテ此承諾ハ、明示的ニ爲サルル場合ト默示的ニ爲サルル場合トアリ得ヤウ。外科醫ノ手術ノ如キハ前者ノ例デ、擊劍ニヨル、毆打ノ如キハ後者ノ例デアラウ。明示ノ承諾アル場合ニ於テハ、別段困難ナ問題ハナイケレ共、何等明示ノ意思表示ナキ場合ニ於テ、果タシテ承諾ノ意思アリヤ否ヤヲ判斷スルコトハ、極メテ困難デアアル。被害者ガ危険存在ヲ了知シテ居タト言フ事實ハ、默示ノ承諾ヲ認定スルニ當リ、最モ有力ナ一ノ證據方法タリ得ルコトハ、勿論デアアルケレ共單ニ被害者ガ危険ヲ認識シテ而モ、之ヲ回避シナカツタト言フコトノミヲ根據トシテ、直ニ終局的ニ承諾ノ意思表示ヲ認定スベキモノデハナイ。

尙默示ノ承諾ニ次イテ、困難ナル問題ハ、危険冒認 (assump-

tion of risk) ノ認定デアル。危険ノ冒認トハ、危険ノ存在ヲ認識シテ、而モ任意ニ (voluntary) 其危険ヲ冒スコトヲ言フノデアアル。例ヘバ爆發物ヲ取扱ツテ居ルノヲ見物スル爲メニ態々立寄ツテ、遂ニ損害ヲ蒙ルニ至ツタ場合ノ如キガソレデアル。此種ノ場合ニ於テハ、假令其爆發物ノ取扱方ニ、過失アルトシテモ、加害者ハ責任ヲ負フベキモノデナイト言ハネバナラス。(註二) 併シ之ヲ見物シタ者ハ、害セラレテモ構ハナイト言フ意思ヲ持ツテ居タトイフコトハ出來ヌ。單ニ任意ニ其危険ヲ冒シタニ過ギヌ。

(註) F. Pollock's, The Law of Torts, p. 165

三、併シ危険ノ存在ヲ認識シテ、之ヲ冒シタ場合ニ於テハ、常ニ所謂危険ノ冒認又ハ默示ノ承諾アルモノト、速断シテハナラス。Smith v. Baker 事件(一八一九年)ニ於テ、原告ハ危険ノ存在ヲ認識シ、而モ之ヲ冒シタニ拘ラズ、之ヲ以テ被告ノ行爲ノ違法ヲ阻却スルトハセラレナカツタ。即チ同事件ハ、原告ガ石切人夫(quarry-man)トシテ、被告ノ石切場(stone quarry)ニ雇ハレ、其作業中起重機ノ不完全ノ爲メニ石ガ墜落シテ、原告ガ損害ヲ蒙ルニ至ツタト言フ事案デアアル。而シテ原告ハ、其頭上ノ不完全ナ起重機ガ危険デアルコトハ、充分承知ノ上デ其下方ニ作業シテ居タ。其レニモ拘ラズ、原告ハ被害ヲ承諾ヲシタモノデナイト、判示セラレタ。尙此外ニモ同趣旨ノ判例ハ少クナイ。

然ラバ被告ガ危険ヲ了知シテ、之ヲ冒シタ場合ハ如何ナル標準ニ依テ、違法阻却ノ原因タルベキモノト、否ラザルモノトヲ區別スベキデアラウカ。此點ニ付テ一般の標準ヲ示シテ居ル判例ハ見當ラナイ。又普遍的原理ヲ把握スルコトハ、困難トサレテ居ル。結局危険ノ大小其他凡テノ事情ヲ斟酌シテ決定スルノ外ハナイ。(註三)

(註三) Salmond's Law of Torts, p. 56

Underhill's, Law of Torts, p. 185

併シ被害者ガ危険ヲ了知シテ、居タ場合ニ於テハ、假令被害承諾トシテ、違法阻却ノ原因トナラナクモ、或ハ加害者側ノ過失否定ノ理由トナリ、或ハ被害者ノ助勢過失ノ原因トナリ結局加害者ノ免責事由トナルコトが多カラウ。

加害者ガ被害者ニ對シテ、危険ノ存在ヲ警告スルダケデ、加害者ガ被害者ニ對シテ爲スベキ凡テノ義務ヲ、果タシタト言フベキ場合ガアル。此種ノ場合ニ於テハ、被害者ガ其危険ヲ了知シテ居タ以上ハ、最早加害者ニ過失ハナイト言ハネバナラス。例ヘバ他人ニ無償ニテ、危険物件ヲ貸與スル人ハ、其借用人ニ對シ、其危険ノ存在ヲサヘ明告シタナラバ、凡テノ注意義務ハ果タサレタモノト言ハネバナラス。從テ其借用人ガ、其物件ニ危険ノ存スルコトヲ知ツテ之ヲ借用シ、遂ニ損害ヲ蒙ルニ至ツタ場合ニ於テハ、假令之ヲ以テ被害承諾トイフコトハ出來ヌニシテモ、兎ニ角加害者側ノ過失ヲ否定スルニ十分ノ根據トナス

コトガ出來ル。

又他人ノ行爲ニ依リ、危険ノ惹起セラレタルコトヲ認識シタル者ハ、其危険ニ應ズル爲メニ相當ノ注意ヲ拂ハネバナラスコトハ、第一章ニ於テ詳説シタ通りデアル。從テ危険ノ存在ヲ了知シテ、之ヲ冒シタ場合ニ於テハ、其危険ヲ冒スコト自體ガ、過失タル場合モアリ、又ハ其危険ヲ冒スニ付テ、必要ナル注意ヲ缺ク場合モアリ得ル。其何レノ場合タルヲ問ハズ、助勢過失トシテ加害者ノ免責事由タリ得ベキコトハ、言フ迄モナイコトデアル。而シテ危険ヲ冒スコトガ過失トナルヤ否ヤハ、其危険ノ程度、大小等 (Magnitude or urgency) ヲ斟酌シ、之ヲ冒スコトガ妥當ナリヤ否ヤヲ標準トシテ、決定セネバナラス。若シ危険ガ少イナラバ、其危険ヲ冒スコトハ必ズシモ不當デハナイ。他人ガ不法ニ惹起シタル危険ノ爲メニ、其行爲ノ自由ヲ奪ハルベキ理由ハナイノデアル。併シ危険ガ大ナル場合ニ於テハ之ヲ冒スコトハ無異ナコトデアツテ reasonable person ノ採ルベカラザル態度ト言ハネバナラス。

五、如斯ク助勢過失ト被害者ノ承諾トハ、實ニ其分界ガ明瞭デナイ。併シ兩者ハ其本質ニ於テ到底混同スベカラザルモノデアリ、寧ろ排他的ノ觀念トモ言ヒ得ル。何故ナラバ助勢過失ハ避ク可キ危険ヲ不注意ニ依リ、避ケザリシ場合ナルニ反シ、被害承諾又ハ冒認ハ、危険ヲ認識シ乍ラ、而モ故意ニ其危険ヲ冒ス場合デアノカラデアル。抑、助勢過失ガ加害者ノ免責事由即チ

被害者ノ救濟權剝奪ノ理由トナルノハ、被害者ニ注意義務ノ違背ガアルカラデアアル。之ニ反シ被害ノ承諾ハ、寧ロ被害者ガ加害者ニ對シ、自己ヲ侵害スベキ權利ヲ附與シ又ハ事前ニ於テ救濟權ヲ拋棄シタルガ故ニ、加害行爲ノ違法性ヲ阻却スルニ到ルモノデアアル。

第六章 海法ニ於ケル損害分擔制 度ト助勢過失

一、上述スル所ノ助勢過失ニ關スル理論ハ、凡テ普通法ノ原則デアテル。普通法ノ原則ニ從ヘバ船舶ノ衝突ガ、衝突船双方ノ過失ニ起因スル場合ニ於テハ、被害船ハ相手船ニ對シテ、損害ノ賠償ヲ求ムルコトハ、出來ヌト言ハナケレバナラヌ。然ルニ海法ニ於テハ、損害分擔ノ原則 (rule of division of loss) 行ハレ、双方ノ過失ニヨル衝突ノ結果惹起セラレタ損害ハ、双方ニ於テ其過失ノ程度ニ從テ、分擔セネバナラヌ。即チ加害船ノ助勢過失ヲ理由トシテ、其責任ヲ免レルコトハ出來ヌノデアアル。

海法ニ於ケル損害分擔ノ原則ハ、海事裁判所ノミニ限ラレテ居タケレ共、一八七三年ノ司法條令ニ依テ、普通裁判所ニ於テモ、總テノ船舶衝突事件ニ適用スベキモノトセラレタ。而シテ海法ニ於ケル損害分擔ノ原則ガ、兩船共ニ過失アルガ故ニ兩船ハ等シク其過失ノ結果タル損害ヲ、分擔セネバナラヌト言フ、

思想ニ基イテ居ルコトハ言フ迄モナイ。此點ニ於テ被害者ニ助勢過失アル場合ニ於テハ、加害者ノ過失ニ拘ラズ、被害者一人ニ於テ、其損害ノ全部ヲ負擔セネバナラヌトノ普通法上ノ原則ヨリモ、遙カニ正義ニ合スルモノト言ハネバナラヌ。即チ損害分擔ノ原則ハ、過失アレバ常ニ責任アリト爲スニ反シ、助勢過失ノ原則ハ、過失ガアツテモ、尙責任ノナキ場合ヲ認ムル結果トナルノデアル。

三、損害分擔ノ原則ハ衝突船舶相互間ニ、其ノ適用ヲ限ラルルモノデハナイ。衝突船舶ト荷主トノ間ノ請求ニ付キテモ矢張適用セラレルノデアル。即チ双方過失ニ基ク衝突ノ結果、積載貨物ニ、損害ヲ生ジタ場合ニ於テハ、荷主ハ兩船ニ對シ其過失ノ程度ニ從ヒ、其損害ノ一部ヲ請求シ得ルニ過ギナイ。普通法ニ於ケルガ如ク、兩船ヲ共同不法行爲者トシテ、各船ニ對シ損害ノ金額ヲ賠償ノ求メルコトハ出來ナイ。

併シ損害分擔ノ原則ハ、無過失船ノ蒙リシ損害及人的損害ニ付キテハ、全然之ヲ適用スルコトハ出來ヌ。即チ兩船ノ過失ニヨリ無過失ノ第三船ト衝突シタ場合ニ於テハ、無過失船ハ双方ニ對シテ、全額ノ賠償ヲ求ムルコトガ出來ル。又人的損害ニ付キテモ、被害者ハ過失船双方ニ對シ共同不法行爲トシテ、損害全額ノ賠償ヲ、求ムルコトガ出來ルノデアル。但シ過失船相互ノ求償關係ニ付テハ矢張損害分擔ノ原則ノ適用ヲ受ケルノデアル。

四、茲ニ特ニ助勢過失ニ關聯シテ、研究セネバナラヌコトハ、損害分担ノ原則ハ普通法上ノ助勢過失ノ理論ヲ、全然排斥スルモノデアルカ否カノ問題デアル。一九一一年ノ Marine Convention Act 以前ニ於テハ、普通法ニ於ケル助勢過失ノ範圍制限ノ標準タル、rule in *Davies v. Mann* (第一章第二節第一款參照) ハ、船舶衝突事件ニ付テモ矢張適用セラルベキモノト、判示セラレテ居ル。其結果損害分担ノ原則ノ適用ハ、結局普通法ニ於ケル助勢過失ノ理論ニ從ヒ、何レノ船舶モ相手船ニ對シ賠償請求ヲ爲スコトヲ得ザル場合ニ、限ラルルモノト言ハネバナラヌ。而シテ普通法上ニ於ケル、rule in *Davies v. Mann* ヲ、海法ニ適用シタル判例ハ一九〇〇年ノ *The sans Pareil* 事件ガソレデアル。帆船 *East Lothian* 號ガ、他船ニ引曳セラレテ航行中、夜間四列縦隊ヲ以テ進行シ來レル艦隊ニ遭遇シタ。然ルニ *sans Lothian* 號ハ不法ニモ、其艦隊ノ前面ヲ横切ラントシテ、戰艦 *San Pareil* ト衝突シテ、沈没スルニ至ツタ。*San pariel* ニ於テハ曳船ノ船燈ハ認識シテ居タケレ共、被曳船ノ船燈ハ之ヲ認メテ居ナカッタ。ソコデ同船ハ曳船ト替リ行クヤ、直チニ針路ヲ替へ、遂ニ被曳船ノ *East Lothian* 號ト、衝突スルニ至ツタノデアル。艦隊ノ前面ヲ横切り航行シタ點ニ於テ *East Lothian* 號ノ側ニ過失ガアリ、又同船ノ船燈ヲ認識シナカッタ點ニ於テ *Sans Pareil* ノ側ニ過失ガアツタ。即チ兩船ノ衝突ハ双方過失ノ結果デアル。併シ同事件ハ、其衝突ヲ避ク

ベキ最後ノ機會ハ、獨リ *Sans pareil* ノ側ニアツタト言フ理由ノ下ニ、損害ハ兩船ニ於テ分擔スベキデハナイ。*Sans pareil* ニ於テ全額賠償ノ責ニ任ゼネバナラスト、判示セラレタ。

五、併シ現行ノ *Marine Convention act* ノ下ニ於テ、船舶衝突事件ニ、前記普通法ノ *rule in Davies v. Mann* ガ如何ナル範圍マデ、適用セラルベキカハ、一ノ疑問デアル。同法第一條ハ“二船以上ノ過失ニ因リテ生ジタル損害ハ、其過失ノ割合ニ應ジテ、各船ニ於テ分擔スベキモノナリ”ト規定シテ居ル。從テ其法文ヲ文字通りニ解スルナラバ、苟モ双方ニ過失アリテ且其過失ガ損害ノ原因トナツタ場合ニ於テハ、常ニ其損害ハ分擔セラルベキモノデアツテ、*rule in Davies v. Mann* ヲ適用スベキ餘地ハナイト言ハネバナラス。

併シ又同法ハ、更ニ“本條ノ規定ハ當事者ガ契約又ハ法律ノ他ノ規定ニヨリ免除セラルベキ責任ニ影響ヲ及スコトナシ”ト規定シテ居ル。(Nothing in this section shall be construed as imposing any liability on any person from which he is exempted by any contract or any provision of law) 約言スレバ法律ニ別段ノ規定アルトキハ損害分擔原則ハ之ヲ適用セズト言フコトニ歸着スル。從テ普通法上ノ前記 *Rule in Davies v. Mann* ヲ以テ、茲ニ所謂“any provision of law”ニ該當スルモノト解スルナラバ、*Marine Convention act* ノ下ニ於テモ、*rule in Davies v. Mann* ハ、適用セラルベキモノト言ハネバナラス。併シ該

原則ヲ以テ、同條ニ所謂 “any provision of law” ニ、該當スルモノト解スルコトハ文理解釋トシテ、多少無理ノ感ガナイデハナイ。若シ此解釋ヲ採用スルナラバ、結局双方失ニ基ク、過失ノ場合デモ、衝突ヲ避ク可キ最後ノ機會ヲ有シナカツタ船舶ハ、損害ヲ分擔スルコトナク、全々責任ヲ免除セラルルコトニナラネバナラス。

六、而シテ此問題ハ一九二二年ノ The Volute 號事件ニ依テ、略解決ノ曙光ヲ見ルニ至ツタト言フコトガ出來ル。同事件ハ商船 Volute 號ト驅逐艦 Radstock 號トノ衝突事件デアツテ、其衝突ノ原因ハ、Volute 號ガ汽笛信號 (whistle signal) ナシニ、其針路ヲ變更シタト言フ過失ト、Radstock ガ volute ノ針路變更ニヨリ、衝突ノ危険ノ惹起セラレテ居ルコトヲ認識シ乍ラ、其速度ヲ増シテ進航シタト言フ過失デアツタ。rule in Davies v. Mann ヲ嚴格ニ適用スルナラバ、其衝突ヲ避クベキ最後ノ機會ハ、Radstock ニアルノデアルカラ、其衝突ニ基ク損害ハ、同船ニ於テ全部負擔セネバナラス。併シ同事件ハ House of Lord ニ於テ、兩船ニ於テ分擔スベキモノト判示セラレタ。併シ此判例ハ、全然 rule in Davies v. Mann ヲ排斥シタモノト言フコトハ出來ヌ。其判示理由中ニ、Lord Birkenhead ハ助勢過失ノ問題ハ陪審員ノ取扱フベキモノデアルカラ、寛容ニ常識的ノ原則 (Commonsense principles) ヲ以テ、決定セネバナラスト言ヒ、暗ニ最後機會說ノ餘リニ技術的デ、實際ノ運用ニ不便ナル

コトヲ暗示シテ居ル。

而シテ同氏ハ更ニ Volute ノ過失ト、Radstock ノ過失トノ間ニハ、sufficient separation of time, places or circumstances ヲ認ムルコトガ出来ヌカラ、兩船ノ過失ヲ分離シテ、何レカ其一ノミヲ以テ衝突ノ原因ト爲シ、以テ損害ノ全損ヲ負擔セシムルコトハ出来ヌト言ツテ居ル。然ラバ Birkenhead 卿ノ、所謂 sufficient separation (十分ナル分離) トハ、如何ナルコトヲ意味スルカ 一ノ疑問デナケレバナラス。而モ同氏ハ此點ニ付何等ノ暗示ヲモ與ヘテ居ナイ。

若シ Volute 事件ガ、普通法上ノ最後機會ノ原則 (rule in Davies v. Mann) ヲ排斥シタモノトスレバ、問題ハ極メテ單純デアツテ、sufficient separation ナル觀念ハ、結局因果關係ノ標準タルニ過ギヌ。即チ兩船ノ過失ニ付キ、先行過失ト後行過失トノ間ニ、sufficient separation ノアル場合ニ於テハ、先行過失ト衝突トノ間ニハ、全然法律上ノ因果關係ヲ認ムルコトハ出来ナイコトナリ、之ニ反シ兩船ノ過失間ニ、sufficient separation ナキ場合ニ於テハ、双方ノ過失共衝突ノ原因トナリ、損害モ兩船ニ於テ分擔セネバナラスコトニナルノデアル。

若シ Volute 事件ガ、最後機會說ヲ排除スルモノデナイトシタナラバ、sufficient separation ハ結局最後機會說ニ對スルーノ制限、又ハ最後機會ノ觀念ニ代ルベキ助勢過失ノ新ナル決定標準トセネバナラス。即チ兩船ノ過失間ニ、sufficient separation

ノアル場合ハ、後行過失者ハ rule in *Davies v. Mann* ニ依テ責任ヲ負ハネバナラヌコトニナルノデアアル。而シテ *Birkenhead* ハ恐ラク sufficient separation ナル語ヲ、此ノ意味ニ於テ用ヒタデアラウ。

尙ホ海法ノ損害分擔ノ原則ニ付キテハ本誌第四卷拙稿英國船主責制度論ヲ參照セラレタイ。

終　　リ。